

そんな彼方にアザレアの花束を

ふろり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県は富士山も望める地、沼津市内浦に江口彼方はやつてきた。そこで紡がれる物語には既視感を感じつつも新しい香りのする物語。

別にハーレムとかじやないです。可愛い曜ちゃんとAqoursのみんなを書いていきます。

基本的には曜ちゃん路線で行くよ
ツイッターの方もよろしくね

↓@syu_iichi1125

目 次

第一章～そして、彼は新しい風になる～

第一話～東京の彼方に～

第二話～淡島の彼方に～

第三話～天国の彼方に～

第四話～網本の彼方に～

第五話～過去の彼方に～

第六話～過去の彼方に2～

第七話～沼津の彼方に～

第八話～浦女の彼方に～

第二章～きっと彼は何かを求めている～

第九話～転入の彼方に～

第十話～昼飯の彼方に～

第十一話～思惑の彼方に～

第十二話～一步の彼方に～

第十三話～刹那の彼方に～

第十四話～波乱の彼方に～

第三章～浦の星女学院絶対防衛線～

第十五話～憎悪の彼方に～

第十六話～被方の彼方に～

第十七話～決意の彼方に～

第十八話～宿泊の彼方に1～

第十九話～宿泊の彼方に2～

第二十話～悪戯の彼方に～

第二十一話「交渉の彼方に」

第二十二話「鍛練の彼方に」

第二十三話「吐露の彼方に」

特別編

「U A 1 0 0 0 0 突破記念」例えばこんな ocean hole

day

120

116 112 107

第一章 ソして、彼は新しい風になる

第一話 エキスパートの彼方に

「彼方くーん！ そろそろ行かないと新幹線間に合わないよー！」
「わあってるよー！」

俺の名前は江口彼方。ついこないだまで近所にあるUTX学園つて所に通つてたんだが、訳あって二年生から静岡県の学校に転校することになった。

「切符もつた？ お弁当は？」

「どつちも大丈夫だつての。つたぐどんだけ心配してんだよかよねえ

⋮

さつきから俺の事を異様なまでに心配してるこの人は小泉花陽。一応俺の従姉妹に当たる人であり伝説のスクールアイドル”μ, S”のメンバーだつた人だ。昔からの仲なんで俺は「かよねえ」と呼んでる。

「だつておばさんから『彼方をよろしく』って言われてたんだよ!? そりやあ心配もするよ！」

「…そつか、母さんが…か」

「…挨拶、していかなくて良いの？」

「いいよ別に。今更つて感じだし」

そう言つて俺は居間の奥にある仏壇をチラツと見た。

「そんじやあ行つてしまーす！」

「向こうに着いたら連絡ちようだいねえー！」

「ほいほーい」

こうして俺は静岡県沼津市を目指すことになった。

（同じ頃）

「梨子、本当に一人で大丈夫？」

「お母さん心配しすぎだよ…向こうにはお父さんだつているし」

「そつは言つても心配なものは心配なのよ」

私は桜内梨子。ついこないだまで近所にある国立音乃木坂学院に

通つていましたが諸事情により単身赴任中のお父さんがいる静岡県沼津市に引っ越すことになつたのです。

「ハイハイ…それじゃあ新幹線来るから行くね。」

「向こう着いたら連絡寄越しなさいよー」

程なくして東京駅に到着。新幹線乗り場を探しているのだけど…大変困つた事になりました。

：新幹線の乗り場つてどこ？

十分位前に「心配しないでー」つてお母さんに言つたばっかりなのに!?ああ、どうしようこのままじゃ間に合わないよう――一人で四苦八苦していたその時、奇跡はきました。

「あのー…何かお困りですか？」

私と同世代くらいの男の子が声を掛けてくれたんです。

昨日から絶賛夜更かし明けで死ぬほど眠い俺氏としては新幹線で眠りたい。早急にホームに向かうべく足を進めてると――涙目でおろおろしながらあつちに行つたりこつちに行つたりしている美少女を見つけた。どうしよう、助けるべきなのだろうか…しかし俺にコミュ力なる物は存在しない　出来ればこのまま無視して通りすぎたいけど…

母さんに良いところを見せたいし、ちょっと頑張ろうかな

「あのー…何かお困りですか？」

よし！初対面の女の子相手には上出来だ！よくやつたな俺！…これでからぶつたら俺引きこもろうかな…

「え、えっと新幹線の乗り場が分からなくて…」

「ちよつと切符見せてもらつても良いですか？」

幸い東京駅構内の経路はよく分かつて。後はホームさえ分かれ

ば：

「つてなーんだ、俺と一緒にやん…」

「えつ…そ、そうなんですか？なら是非連れてつて下さると嬉しいかなあ…なんて。えへへ…」

な、なんなんだこの可愛すぎる生き物は!?え、ちょっと待て、これ

はやばい。萌え死ぬ。

「こつ、こちらこそ！」

さつきまでの眠気は一瞬で吹き飛んだ。そりやあねえ…？

「あ、そういうばまだ名乗つてませんでしたね。俺は江口彼方。今年から高校二年です。」

「あ、同じ年だつたんだ！私は桜内梨子。今年から高校二年だよつ「マジか…大人っぽいしてつきり年上だと思つてたよ」

「ええつ!? そ、そんなこと無いですよ…」

すごい顔真っ赤にして照れてる。うん、文句なしに可愛い！神様、最高の旅立ちをありがとう。向こうでもやつていけそうです。

「じゃあそろそろ行くか」

「うん！」

そういえばどこに行くんだろ…べ、べつに聞いても大丈夫だよな？ 気持ち悪がられたりしないよな？

「そ、そういうば桜内は一人でどこに行くんだ？」

「私？ 私はね——」

三時間後、俺は目的地である静岡県内浦に来た。：いや。俺たちは、が正しいな。

「まさか行き先まで一緒だつたとは…」

そう、俺と桜内は乗る新幹線どころか最終的な行き先までビンゴしていたのだ。三時間前までは美少女と喋つたぜひやつほーうい！ だつたが今はそんなこと言つてられない。

「こんなことつて実際にあるんだね…」

「…俺桜内と家隣でも驚かないわ。」

「やめよう。そういうのネットじやフラグつて言うんでしょ？」

「…………つかぬ事をお聞きしますがご住所は？」

「…………ははつ」

思わず笑つてしまつた。何故なら。

「…我が家の真後ろだわ」

「…うん。私驚かない。」

「ふう…」

「ま、とりあえずこれからは近所さんとしてよろしく頼むぜ！」

「そうね、よろしく！」

「じゃあそろそろ新居に行くK…」

出発しようとしたその直後、携帯がなつた。

だれなんだ一体…と思いつつも桜内にジエスチャーで待つてと伝えてから画面をスワイプした

『彼方くん!? 大丈夫!? 生きてる!』

「電話に出た第一声がその質問はおかしいだろ!?」

案の定かよねえだつた。

『それでどう? 着いたの?』

「一応は…。なんか東京駅であつた美少女と新幹線の席やら行き先やら家の場所やら色々同じつていうマジで意味がわからんない状況」

『ええつ!? なにそれ、イミワカンナイツ!』

「真姫さんの持ちネタパクんなよ』

まあ確かにイミワカンナイツて言いたくはなるんだが。

「ま、後はどうにかなりそうちから心配はいらんよ」

『そう? ジやあ、頑張つてね! ファイトだよつ!』

『だから人のネタパクんなつて…』

それ穂乃果さんのだし。さて、本当にそろそろ新居に行かねば…：

…どうしよう。さつきから顔が熱くて仕方ないつ！

なつ何が東京駅であつた美少女よ！ 本人目の前にいるのよ!? もう恥ずかしすぎるよう…

「おーい桜内ーそろそろ行くぞー」

一人で赤くなつてたらいつの間にか江口くんの電話が終わつてたみたい。はあ…そろそろお父さんのとこ行かないと。

「ねえ、さつきの電話つて誰から?」

「ついいこないだまで同居してた従姉妹だよ。生きてるかどうか確認された」

「江口くん確かに弱そう…（笑）」

「（笑）じゃねえよ…まつたくこんなんで日本で一番人気のあるスクールアイドルだつて言うんだから笑わせるわ」

「スクール…アイドル？なあにそれ？」

愚痴を溢す江口くんから謎の言葉が出てきました。…うん、確かに自分でも流行とかに疎いのはわかってる。だからってそんなちよつと言葉にするのが難しいような顔しなくてもいいと思うんだけど!? 「…うそ、だろう？秋葉原住んでたんだから流石に名前くらいは…いや、それ以前に君音乃木坂だつたんだろ？いくらなんでも…」

「だ、だつてずっとピアノしかやってこなかつたんだもん！」

このあとスクールアイドルについて大体のことは教えてもらつたりしたらいつの間にか家に着いていました。

「じゃ、俺はこっちだから。」

「うん。またね、江口くん！」

桜内と別れた俺は新たな家に入った。どうやら賃貸らしくちよつと古い感じがするけど案外嫌いじゃない。気持ちが

「今この地に、我が新しき砦を創造する！」

だいぶ厨二臭い台詞を吐いてた。事情があるにせよ初めての独り暮らしにはワクワクするぜ！

第二話 タイトル

「前回までのあらすじ」

東京の千代田区、秋葉原から静岡県沼津市内浦へと向かつていた俺、江口彼方はその途中で偶然にも行き先が同じだった美少女、桜内梨子と出会った。以上！

とりあえずこれからここに住むことになる訳だから東京駅で買ったお菓子を持つて挨拶に行くことにした。まずは一番近くの千万旅館だ。

「ごめんください！」

はーい、という間延びした声と共に女性が現れた。あらやだ美人。「今日から向かい側に住むことになりました、高校二年の江口彼方です！」

「まあ礼儀正しい子なのね！全く、うちのチカにも見習つて欲しいものよ…」

「あの、チカさんとは？」

「私の妹なんだけど…ってああ、私が名乗るのを忘れていたわ。私は高海志満、一応この旅館を切り盛りします。よろしくね♪」

「はい、よろしくお願ひします！あ、これつまらないものですか…」
とりあえず年輪堂のバームクーヘンを選んできたんだけど…大丈夫だよな？これがもし…

『はあ？何これ。大人なめてるの？こんなで満足出来るわけねえだろガキ！』

とか言われたら引きこもるわ。メンタル的につらい！

しかし帰ってきた言葉は意外な物だった。

「え、年輪堂つてバームクーヘンの名店よね!?こんな高級な物は受け取れないわよ！」

「いや、でも受け取つてもらわないと困るんですけど…」

断られる可能性を考えてなかつた…でも、不思議と嫌な感じはしなかつた。

「とりあえず受け取つてください！これは俺が使つていいお金で買つてるので大丈夫です！」

「そ、そう…？じゃあ今回はお言葉に甘えちゃおうかな♪」
や、やつと受け取つてくれた…この美人お姉さん、かなりの頑固者だ。

「ぜ、ぜひー…ご家族で食べてください！」

「本当にありがとうね。これ、お返しと言つてはあれだけど…」
そう言つて志満さんは俺に大量のミカンを渡してきた。そういうば特產品だつて聞いたな…

「挨拶に来た身でわざわざすみません…」

「いいのよ、それくらい！これからはお互い様なんだから♪」

続いて向かつたのは桜内の家だ。桜内とは面識あるが父親がいるとのことだったのでそちらに挨拶しなくてはならない。

インターホンを押すと桜内が出た。

『はーい』

「あー桜内か。江口だけどお前の父さんいる？」

『いるよ。呼ぶ？』

「ああ、頼む」

暫くするとメガネをかけた瘦せ型のおじさんが出てきた。

「やあ、君が江口君か。梨子から話は聞いてるよ、娘を助けてくれてありがとうね。」

「いえいえお気になさらず！」

うーん…なんというかこの人、とても弱々しいというか霸氣を感じないというか。人と喋るのが苦手なのだろうか？

「あ、つまらないものですがこれを」

「あ、ああ。どうもね。」

「……………」「」

か、会話が続かない…この人会話下手くそ過ぎでしょ！いや、俺

が言えた義理では無いのだけれども！

「お父さん緊張しそぎだよ…江口君困つてるじゃない。」

「あ、ああ…取り敢えずこれからよろしく頼むよ」

「は、はい…」

どうにかして桜内家を後にした俺は淡島行きの連絡船に乗った。なんでもダイビングショツプがあるんだとか。そして店員さんが美女なんだって！こりやあ行くしかないつしょ！

ほどなくして淡島に到着。件のダイビングショツプは船着き場のすぐそばにあつたので早速入ることにした。

「いらっしゃいませー！」

「あ、ああどうも。最近近所に越してきた江口彼方といいます。」

び、美女キターハー（▽。）―――！

「へえ、引っ越して來たんだ！私は松浦果南。一応こんななんでも高三だよ♪」

「じゃあ先輩にあたるわけですか。俺は高二なんで。」

うん、この人可愛い上に大きいわ。動く度に揺れる。しかもダイビングスース着てるから体のラインがくつきり浮かんでるし。非常に眼福なのと同時に直視できねえ…！

「…ねえ、なんでさつきからそんなよそよそしいの？もつとフレンドリーに行こうよ！」

「ま、松浦先輩近いですって…！」

「ほらそこ！先輩なんて付けなくて良いから！普通に果南って呼んでよ！」

く、くそう！潮の香りと女の子特有のいい臭いが俺の鼻腔をくすぐるう！

「果南……さん」

「か・な・ん！」

「か、果南！これでいいのか!?」

「はい良くできました♪」

ちよつと…この人かなりアクティブなんだけど…個性強すぎじゃ

ね？

「あれー？果南ちゃんお客様さん？」

「男の人なんて珍しいねー」

一人で勝手に疲れてると後ろから二人の女の子がやつて来た。と
いうか二人とも…

「可愛い…」

「へえっ!?」

あ、やつべ…まさか漏れてたとは…

「よ、よよよ良かつたね曜ちゃん！」

「え、い、いいいや！多分千歌ちゃんに言つたんだと思うよお!?」

「いや、二人ともだが」

「ええええええ…?!」

いや、思わず口に出してしまつた俺が言うのもアレだけどさ、驚き
すぎじゃね？

「ふーん…私には何も無かつたのに千歌たちには出会い頭に可愛
い、か。ふーん…」

「だああそう言うことじゃないんだよ！」

結局、果南を慰めて二人の女の子を落ち着かせるのに10分くらい
かかった。俺何しに来たんだつけ…

「改めましてここにちは！私は高海千歌だよ！」

「ああよろしく！…というか高海…？お前の家もしかして旅館だつたり
する？」

さつき十千万行つたときのお姉さんの名前が高海志満さんだつた
はずだからもしかして…

「すゞーい！なんで分かつたの⁈」

「いや、家が丁度十千万の目の前でな。さつき挨拶してきましたところな
んだ。」

「なーんだそう言うことかー…私てつきりエスパーかと思つたよ」

「どういう過程を通つてその考えに行き着いたのか小一時間程問い合わせ
めたいがそれはまたの機会にしよう」

とりあえず高海の第一印象。アホ、天然、可愛い。

「はいはーい！私は渡辺曜！特技は前逆さ宙返り三回半抱え型で、

趣味は色んな制服を作つて着ることです！ヨーソロー！」

高海の自己紹介が終わつた瞬間すぐにもう一人の女の子が始めた。めちゃくちやハイスペックじやないですかあなた。今か今かと待ちわびていたのか随分元気のいい自己紹介だつたな：

「確かにヨーソローッて船の舵を切るときに『まっすぐ進め！』って意味だよな？あと船人の冷やかし文句だつけか」

「お、おおおお！すごい！知つてる人初めてだよ！嬉しいなあ…えへへ♪」

おお、笑顔が可愛い。眩しいなあ…：

渡辺の第一印象。器用、元気、可愛い。

「そういえばまだ名前しか聞いてなかつたよね」

「彼方君のこと色々おしえてよー」

「ええ…めんどくさいな…あー我輩は江口彼方である。名前はまだない」

「いや、あるじやん」

「趣味は読書と辞書を読むことだ。」

「随分渋い趣味だね…」

苦笑いの渡辺。まあ自分でもわかってるよ…確かに渋いわな。

「とりあえずこれからよろしくな。」

「これら辺は美少女が多くて素晴らしいな…引っ越してきて正解だつたぜ！」

「おまけ」

「あ、後写真撮つたりするのも好きだな。」

「ヘンタイ…」

「解せぬ」

第三話 ～天国の彼方に～

～前回のあらすじ～

果南と曜と千歌の三人とエンカウトした彼方。お互に自己紹介が済んだところで彼方に変態の称号が与えられた。ざまあねえぜ。

淡島で色々あつて、そろそろ帰ろうと思つていた矢先、後ろから元気な声が聞こえた。

「おーい彼方くーん！一緒に帰ろー！」

このアホっぽい声は高海だ。間違いない！

「別に構わんぞー」

高海と渡辺が追い付いたところで再度歩き始めた。

「…ねえ、さつきなんか失礼なこと考えられた気がするんだけど」

「…………さて、なんのことやら」

なぜ心を読んできた!? 恐るべき高海。

「それより彼方君つて学校どこに通うの？」

「どこつてそりやあ当然…」

…そうだ。これから生活する上で一番大切なことを聞き忘れていた。

「もしかして…聞いてなかつたり？」

「…渡辺。俺はこれから通う学舎のことを聞き忘れていた…」

「ちなみに私達はあの丘にそびえ立つ浦の星女学院つて所に通つてるんだ♪」

「へえ…随分でかいな。つてそんなことより学校のこと聞かなくちゃや！」

とりあえずかよねえに電話をかけた。

『もしもし彼方君?』

「あ、かよねえ。東京出る前に聞くの忘れてたけどさ、俺の通う予定の学校つてどこ?」

『ああ教えてなかつたつけ?』

『かよちん意外と抜けてるにやー』

「その声は凛さんですか？」

『だいせーいかーい！勇気凛々、星空凛だよ☆』

「…大学生になつてそのキャラはキツいんじゃないでしょうか？」

『…うん。なんか急に恥ずかしくなつてきた…』

じゃあやるなよ！という突っ込みはあえてしないでおいた。

「…つてそだ！学校だよ！かよねえ、俺は一体どこへ行けば！」

『彼方君落ち着いて…えつと名前はね…』

浦の星女学院高校

それが俺の第二の学舎の名前だつた。

……うん。おかしいよね!?どう考えたつて女子高だよね!?俺男
だよ!?

「待て待て待て！なぜ俺が女子高に行くことになつてるんだよ
だつたらしくて…」!
『それがね、なんかおばさんがそこの学校の理事長の母親と知り合い

「あー…ハイハイわかつた、ちくしょうめ」

大方母さんの遺言書に書いてあつたのだろう。

もし自分の身に何かあつて彼方が学校へ行けなくなつたら浦の星
女学院高校に入れてくれさい、みたいなことが。まったく、母さんつ
てば何やつてんだよ… でも学費とかつて考えてたからタイミング
としてはちょうどいい。そういう事情があるんなら多少肩身が狭く
ても今は亡き母さんに感謝しないとね。

『じやあそつちが少し落ち着いたら連絡ちようだい。遊びにいくか
ら』

「…まさか九人で？」

『もちろん♪』

「くるなああああああ！」

そう叫び終わつたあとはもう既に電話は切れていた。今の俺の家
じゃとも九人なんて入んないぞ…

「…一人とも。ちょっとまずいことになつた。」

「もう電話の時点で色々まづかったよね、千歌ちゃん」

「本当だよ！ 一体何回叫んでるの？」

「だああそれはいいから！ ……俺の第二の学舎はとある事情から女子高になつた…………らしい。非常に不本意ではあるが」

そりやね？ いくら事情があるからって女子高は無いだろ！ って心の底から叫びたいよ。だつて俺はちょっとと思春期が遅れてやつて來た健全なDKなんだよ？ 乙女の花園に野郎が一人つて流石にまずいつしょ？ ちなみにDKは男子高校生の略であつて決してド○キー コングでは無い。

「…一体どんな事情があると男子が女子高にこれるんだろ」

「これがわからないのは千歌がバカだからじやないよね？ 曜ちゃん。」

「大丈夫。私もさっぱりだから」

「その疑問自体に異論は無い。まあ遅かれ早かれ話さないととは思つていたが…」

この話は出来ればしたくないけどそういうわけにもいかない。腹を括るしか無さそうだ。

「二人とも、今からちよつと長くて真面目な話するけど時間大丈夫？」

「まあ私は大丈夫けど…」

「私は終バスまでに間に合えば大丈夫だよ」

「そうか…じゃあよく聞いててくれ」

「俺んちは母子家庭だつたんだ。俺が三歳のときに親父と母さんが離婚してね。そこからは俺と母さんの二人暮らしだ。まあその話は追々するけど今はあんまり重要じやないからはしよるよ。

俺が中3の時。学費で母さんに負担を掛けたくなかった俺は都立高校に入るために死ぬ気で勉強した。でも夏休みにアクシデント…とでも言おうか。それが起きたんだ。」

「アクシデント…？」

さつきまでの和氣あいあいムードから一転、随分真面目な空気になつた。むしろそつちの方がこつちとしては助かる。

「…母さんが悪性腫瘍——癌で倒れたんだ」

「—————っ！」

「気付いた時にはもうあちこちに転移してて手のつけようが無かつたらしい…」

「……そ、それで？」

「……なんでかな、こうして話してるとだんだん止まらなくなる。どこかで落とし所を見つけなきや…」

「母さんがさ、言つたんだよ。『抗がん剤なんて要らないし手術もしなくて良いからね』って。今の時代可能性は低くとも癌は治せるんだ。その時の俺だつて当然抗議したよ。理由もわからず『なんでだよ！』って言いまくつた。」

…いかん、目頭が熱くなつてきちまつた。これはマズイ、早く話を切り上げろと本能が告げるのに口は勝手に動く。

「…母さんが手術も治療もしない理由なんてただ一つだつた。『あんたを高校と大学に入れなくちゃなんないのにこんなところで金使つてられるか！』って笑いながら言つてくれた。…嬉しかつたよ。その言葉を聞いて何も言い返せなかつた。」

前を向けば高海が顔をうつむかせ、渡辺が手で口を覆つてる。俺もそろそろヤバいかな…

「…結局、母さんは半年持たなかつた。もつと長生きできたかもしないのに、俺の事を優先させた結果死んでしまつた。だから今の俺に家族と明言できる人は…っ、い、なくて…！」

そこが限界だつた。結局俺は母さんが死んだことより一人になつたことの方がよっぽど辛かつたみたいだつた。とんだ親不孝もんだな俺…

不意に、前から抱き締められた。俺が呆然としてるとその人物は一思いに叫んだ。

「一人なんかじゃない！江口くんは、彼方くんには私達がいる！」

グレーの髪の毛に少し残つた潮の香り。渡辺だつた。

「だからさ、もう我慢しなくていいんだよ。辛いときに泣くくらいさ、恥ずかしいことなんかじやないとと思うよ？」

「わた、なべ…？」

「私にはお母さんがいる。お父さんがいる。だからきっと彼方くんが

背負ってきた痛みや辛さをわかつてあげることは出来ない。軽はずみにわかつてゐるなんて言えるはずがないもん……！でもね、その辛さや苦しみを聞いてあげることはできる！」

今度は右手が暖かくなるのを感じた。

「そうだよー、これから私たちは友達なんだから溜め込む必要なんてないんだから！」

ああそうか……俺は溜め込んでいたのか。

母さん、俺はこれから強く生きていく。もちろん母さんの分までだ。だから今日は、今日だけは弱くとも許してくれ。会ったばかりの、自己紹介だつてしまはっかりの友達が抱き締めてくれてるからさ。

「渡辺、たか、み……俺は……俺は……うああああああああ！」

辛かつた。母さんを失つた俺はひとりぼっちだと思ってた。苦しめた。恩返しすら出来てないのにのうのうと一生生きていく事が。母さんを俺という枷に縛つてしまつていたことが。

結局俺の胸のうちにくすぐついていた苦悩をこの二人は日が暮れるまで聞いて、あやして、抱き締めていてくれた。

第四話 ジャン本の彼方に

「前回までのあらすじ」

引っ越ししてきたはいいが転入先の学校名を聞いてなかつた彼方。それを機に自分の過去を話せざるを得なかつたのだが耐えきれず涙。羨ましいことに曜ちゃんからハグされてた。爆発しろ（切実）

……やつちまつた。

「うがああああああー！会つて間もない女子に抱きついた挙げ句泣きわめくつてどんな羞恥プレイだよ！」

結局あのあと俺が落ち着いた頃にはどうに日がくれていた。渡辺は終バスを逃したみたいで高海んちのトラックで送つてもらつてた。本当に情けないやら申し訳ないやらで…そして家に帰つてきた。そろそろ風呂に入つてさつさと寝たい：現代っ子風に言うと号泣ワズ、帰宅ナウ、入浴ウイルつて感じだな。俺には似合わなかつた…

翌日、俺はとある場所へ行くため淡島へ戻つてきた。

「お、江口くんおはよー！」

「ああまつうr：果南おはよう。」

淡島には果南の家がやつてるダイビングショッピングがあるから船から降りると遭遇することが多々ある。まだ二回しか来てないけど。

「今日はなんの用事？」

「ああ、あそこの淡島ホテルつてところに用があつてね」

「ホテルに？なんでまた…」

…氣のせいだろうか？果南、淡島ホテルつて単語に反応してた気がする。

「正確にはホテルの支配人をしてる人とそのご令嬢に用があつてね

…」

「…………そつか。なら私はもう行くね。」

「え？あ、おう…」

…やっぱりおかしい。何かあつたのか？気にはなつたが無理に聞

くのも野暮かと思つてそのまま足を進める事にした。

十分も歩くとホテルに着いた。こんなでかいホテル一生かかつても泊まれない気がする…

フロントで要件を伝えると最上階に案内された。

「し、失礼します…」

「H·i！君が今年から浦女に転校してくるboyね！」

「は、はい。江口彼方と申します。」

「私の名前は小原鞠莉。気軽にマリ一って読んでね！」

「は、はあ…」

「この人テンション高すぎじゃね!? 疲れないのかなあ…」

「あれ、小原さんのお母さんは…」

「NO！マリ一よ、マ・リ・ー！」

「マ、マリ一… それでマリ一のお母さんは？」

「ああママならさつき東京に行つたよ？私は要件を伝えるだけだから一人でも大丈夫だけど…」

マリ一はそこで言葉を切るとチラリとSPを見て

「崎元、大谷、しばらく部屋の外に居なさい」

SP達は無言で頷くと音も立てずに部屋を出た。マリ一強い。

「…どうやらあなたのママの所に行つたみたいね」

「つ！」

…そうだった。そういうえばマリ一の母は俺の母さんの友達だったんだ。ならばまた事情を話さないといけないな…昨日あんな事になつた手前できれば話したくないが…

「…えつと「stop！」

「キミの事情はママから聞いてるよ。辛い過去を無理に思い出したくないでしょ？」

「…大変助かります。」

「My pleasure! 気にしないでね！」

この人はテンション高いだけじゃなかつた。相手に対する心遣いがてきて、フォローも忘れない。SPを外したのもこの会話を聞かせないためだろう。この人学校では後輩にモテそうだな…

「それで、今回はどんな要件だつたんですか？」

「oh! 忘れるところでした！カナタ、あなたに present よ！」

「……これは制服ですか？」

「yes! これが浦女でのカナタの popular fashion よ！」

「……………つて！これ女子用じゃないですか！俺に女装させる気ですか!?」

いくら女子校に行かねばならないとはいえ流石に女子服は無いだろ！マジで不登校になるぞ！」

「……ごめんね。私も頑張つただけど…」

「そう萎れないで下さい、なんか責めづらいじゃないですか…」

「カナタ：優しいのね」

「紳士は女性に優しいんですよ…」

「じゃあ試着しよっか♪」

「絶対イヤです」

そのあとも不毛な言い争いが続いた結果俺が折れた。十千万でバームクーヘン受け取つてもらうより疲れた。そして今の俺の姿はと言ふと…

「…………どうしてこうなった」

「あつはははははははは!!! 今のカナタ最高に cute よ！」 力

シャカシャ

「ちよ、写真撮らないで下さいよ！」

浦の星女学院の制服（♀）を着ていた。く、くそぅ…死ぬほど恥ずかしい！これからこれを着て登校とか考えたくない。もういつそのこと駿河湾に沈めてくれ…

「あ、ウイッグとメイクセットあるけどどうする？」

「丁重にお断りいたします…」

しかしどうした物か、本当にこれを来て毎日登校…

「さあーてジョークはこら辺にして…」

「やっぱそうですねよかつたーーー！」

断言出来る。今が人生で一番嬉しかった。つまんない人生おくつ
てきたなあ…

「はい、これがキミだけの制服よ。特注で作つたんだから大事にして
ね♪」

「はい、もちろんです！」

女子服で登校しなくて心底良かつた…

「あ、因みにあの女子服つて洗濯した方が良いですかね？」

「あら、それ私だから気にしなくて良いわよ？」

「ええええええ！」

続いて俺は三津に向かつております。本当なら帰りたかつたのだけ
けど…

『うちの学校の生徒会長の家に行つてきてちょうどだい！』

『…なんでもた』

『あの娘男の子と話すの慣れてないから入学式までにはね？』

『ええ…めんど『カナタの女装写真の拡散準備なら整つてるわよ？』

喜んで向かわせて頂きます！』

というわけである。今思えばこれは詐欺、あるいは脅しなんじやない
か…？しばらく彼女には逆らえそうにない。

「んで生徒会長様のお宅は…つてうおおおでけえええ！」

ヤバイだろ、でかすぎだろ！昔の武家屋敷かよ！戦闘中やつたら最
高に面白そうである。

「すみません、江口彼方という者なんですが黒澤ダイヤさんはい
らっしゃいますか？」

「はい、私がダイヤですが…あなたが鞠莉さんが言つていた方です
の？」

「は、はい。一応そういうことには」

「わかりましたわ。ではこちらへ」

綺麗な黒髪にすらりとした足。端正な顔立ちと典型的な大和撫
子つてかんじだ。海未さんに似てるかな…？

まあ何より「ダイヤ」っていう名前に驚いたけどね…（笑）

そして言われるがままにダイヤさんに付いていつてるとでつかい部屋に案内された。そちらへ、と座布団を指されたので座ることにした。

「改めて初めまして。浦の星女学院で生徒会長を務めております黒澤ダイヤです。」

「こちらこそはじめまして、今年から浦の星女学院に在籍させていただきます江口彼方です。」

……会話終了。すっげーデジャビュを感じるんだが!? というかこの初々しいかんじがなんとも…

「お見合いみたいですね…」

「なつ…//…//…//…」

アレ? おかしいな…俺精一杯ボケたつもりなのに…:

「あ、あ、あなた! 言うに事欠いてお見合いなんてワード普通出します

? ! 破廉恥ですか、とても破廉恥ですか!」

「あ、すみません…場を和ませようと思つたのですが逆効果だつたみたいですね」

「え……? そ、そういうことでしたの…こちらも急に立ち上がりたりしてすみませんでした…」

ちょっとと激情型だけど自分に非があるとわかれればしつかり謝ることができる人なんだな…人間として尊敬したくなる。

「因みに俺の入学経路については知つてるんですか?」

「ええ、鞠莉さんから…大変でしたのね」

「まあ…でも今は支えてくれてる人がたくさんいるので。東京でお世話になつた人たちには感謝してもしきれませんよ。」

「東京で江口さんがお世話になつた方々?」

「ええ、まあ自分の従姉妹にあたる人なのですがね。生徒会長、sつて知つてます?」

その瞬間生徒会長の表情が変わった。今まで(○、ー、○)だったのがw(。○。)wつて具合に。ちょっとと極端だつたかな…

「あなた…、sの方が親族にいらつしゃいますの…!?

「え、ええ…かよねえ——小泉花陽は俺の従姉妹にあたります。」

「えええええええ!?」

…さてさて、先が思いやられる今日この頃。

第五話 ～過去の彼方に～

～前回のあらすじ～

淡島ホテルに呼び出された彼方。戦々恐々としながら入ると金髪美少女小原鞠莉と遭遇。女装させられた。ざまあ見やがれ！曜ちゃんのハグの代償はでかいんだよバーク！

～彼方が内浦ですつとこどつこいしてゐる頃秋葉原では～

「うーん：彼方君大丈夫かなあ…死んでないかな…」

「彼方くんに会わなかつたら今のかよちは見られなかつたにや～」

私の名前は小泉花陽。今は普通の大学一年生ですが昔はスクールアイドルをやつてました。

「それより絵里ちゃんには彼方くんが発つた事は伝えたのかにや～？」「もちろん。なんだかんだで絵里ちゃんが一番彼方君のこと面倒見てたからね」

そうなんです。私たちの2つ上の先輩、大学三年生の絢瀬絵里ちゃんは彼方君の面倒をたくさん見てもらつたのです。もちろん、Sの皆も彼方君のことを気にかけてくれていました。

「あの頃はすごい大変だつたよね…」

「本当に…」

あれは二年前、私達がアキバドームでのファイナルライブを終えた後のことです。

『花陽、疲れてるところ悪いけど明日姉さんのどこ行くわよ』

『別にいいけど…急だね？』

皆と打ち上げが終わつて帰つてきたらどこか悲しげな表情のお母さんから言われた言葉です。

『姉さんが…癌で亡くなつたわ』

『え…』

それは急でした。私のお母さんのお姉さん—私の伯母さんに当た

る人が亡くなつたと聞いたのは。

『まあ私は前から事情も知つてたから驚きはしないけどね…』

お母さん、無理してる…多分私を不安にさせないためだと思う。なら指摘するのは野暮だよね…

『え、でも待つて！なら彼方君は…』

『そうなの。あの子お父さんいないから家族がだれもいないのよ…それにもうちは親戚も少ないからね。私達の母さん、父さんはとつくな他界してるし兄弟だつて私だけ。このままじゃ彼方君児童相談所に預けられちゃうの…』

伯母さんの息子さん、つまり私の従兄弟にあたる江口彼方君にお父さんはいらない。保護者がいないと児童相談所に預けられるのは当たり前――だから彼方君を引き取るというわけでした。

『もちろん私は賛成だよ！』

『良かつた：お父さんも賛成してたわ。息子ができるみたいでいいね！つて』

なんともお父さんらしかつたです。結局私達は彼方君のいるアパートに行くことになつたのです。

（翌日）

『彼方君いる？花枝伯母さんだよー』

……反応無し。

『…でないね』

『んー…おかしいなあ…彼方くーん？』

二回目を呼び掛けると流石に反応があつた。しかし中から出てきた彼方君を見て私達は絶句を禁じを得ませんでした。なぜなら…

『ああ花枝伯母さんにかよねえ…どうぞ』

『どうぞつてあなた…！ガリガリじゃない！』

そう、冗談抜きにガリガリだつたのです。とてもまともに食事を取つてるようには見えませんでした…

『…まあ立ち話もなんですからどうぞ中へ。その話は追々…』

『彼方君…』

とりあえず私達は彼方君の部屋へ入ることにしました。中は片付

いていて余分な物が一切ありませんでした。

…そう、必要最低限の家具しか置いてなかつたのです。小さめの冷蔵庫、棚が何個か、小さいテレビ、机。それ以外は何も。

『ああ二人ともこちらへ…小さい机ですみませんね』

『いいえ、今はお茶なんてどうでもいいわ。なんでそんな体なのか

説明して頂戴』

『なんでつて…食べる時間が勿体無くてつい…あ、でも水は飲りますから安心してください』

『…いつから食べてないの?』

最初に来たときよりかは平静を保てていたのではないでしょか。つとめて普通に聞けたと思います。

『母さんに腫瘍が見つかった時からかな…悪いけど食べる余裕なんかなかつたよ。時間的にも金錢的にも』

『…つ』

伯母さん—彼方君のお母さんが倒れる前の生活は決して裕福などではなくむしろ貧乏のそれに近かつたのではないでしょか。そこに伯母さんの入院費ときたら間違いなく生活に影響が出る。だから彼方君は…

『まあ簡単に言うと食べれなかつたわけですね。もつとも余裕あつたつて食べる気はもうどう無かつたけど』

そこまで苦しんでたのに…ならなんでお母さんは助けてあげなかつたの…?』

『お母さん、知つてたの…?』

『…姉さんからはこう言われていたわ。』

—私も彼方も強い。絶対に盲信なんかじやないわ。だから、私達を助けないで—

『…でも今の彼方君を見ると私のとつた行動は正しかつたのかし『あの』』

お母さんが喋り終わる前に彼方君が口を開いた。

『今必要なのは i f を考へることじゃないでしょ? t o d o を考えないと』

…なんて強い子なんだ、と思いました。きっと取り乱していないのもこの考えに基づくものなんでしょう。

『泣いて悲しむより前を向いて今日を必死に生きる事が今の俺の todoなんですよ』

『本当に…姉さんの子だわ』

私も口にはしませんでしたが同じ事を考えました。伯母さんはいつも言っていたんです。

—あれこれ可能性考えるより今やるべきことを見つけなさい—
この親子は強いです。だからこそ心配になる。

『彼方君!』

『は、はい!』

『あなた今日からうちに来なさい!』

こうして彼方君がうちに来たのは二年前の夏の終わりでした。

「そういえば彼方君ガリガリだつたにゃ」

「マッチ棒だよね、マッチ棒」

凛ちゃんと冗談言い合つてるとメールの通知が一本きました。

from: 絵里ちゃん

花陽、久しぶり! そつちの大学はどうかしら? 私は大学内でもまだ
たまに

「μ, sの絵瀬絵里ですか!?」

つて聞かれることに驚きを隠せません…（汗）

もし暇ならこれから会いたいのだけれどどうかしら?
「絵里ちゃんがこれから会いたいって」

「本当に!? 行こう行こう!」

「もちろん♪ 彼方君の昔話の続きをしたいしね!
どうやらこれから楽しくなりそうです!
おまけ♪

「はあ…彼方君いないな…会いたいな…」

メールの文体とは裏腹に絵里は自宅でショボーンとしてた。

第六話 ～過去の彼方に～

～前回のあらすじ～

内浦で彼方が死んでないか心配になる花陽。大丈夫だ、問題ない。
(若干古い)

それをネタに凜と昔話に花を咲かせた。につこり笑顔は浮かばなかつたがな。

一区切りついたところで絵里から一通のメールが届いた。久しぶりに絵里宅へ向かうことにしたのだつた。

ピンポンと一般家庭でよく聞くインターほんがなる。あれから三年たつた今でも絵里ちゃんちは変わらないままです。

「はーい：つて花陽に凜！待つていたわ！」

「い、いつになく絵里ちゃんのテンションが高いにや…」

さあさあと押される感じで私達は絵里ちゃんの家に入りました。

「それにしても急だつたよね。絵里ちゃん最近どう？」

「彼方君が静岡行つてからもう色んな事にやる気が起きなくなつてるわ…私も静岡行こうかな」

どうにも絵里ちゃんは彼方君がいつたそばからこの調子らしいです。

「ポンコツエリーチカにや」

「うるさいわねえ…ボルシチにするわよ」

「え、絵里ちゃん目がマジにや…」

「あはは…なんか昔の彼方君みたいだね絵里ちゃん」

「あー確かにこんな感じだつたにや」

そう、これは私の家に彼方君が初めて来たときの話です――
まだ渋る彼方君を半ば無理やり小泉家に連れてきた日の夜。とりあえず私とお母さんで協力して目一杯ご飯を作りました。

『あ、あの…これは一体』

『いいからいいから。まずは彼方君を太らせないと』
『そうだね！これは腕がなるよー…！』

最初は見たことない量のご飯に驚いているのかと思つてました。

しかし現実は…

『あ、あの…俺食べたら全部出しちゃうんですけど…』

『え、ええ？ そんなに不味そうに見える…？』

吐くほど不味そう、と私達は解釈していましたが実際は違いました。

『そ、そういうなくて…前に缶詰め食べた時もおもいつきり吐きました。その、何て言うんですかね…』

前に世界が仰天するニュースを見た時にある病気の名前を耳にしました事があります。頭の隅っこにあつたその言葉をふと思い出しました。

——拒食症——

普通は思春期の女子のダイエットの果てに発症する事が多く男子がなることはあまりないはずです。しかし今の彼方君を見る限りそうとしか思えません。

『お母さん！ 車だせる！？ 早く病院に連れていかないと！』

『え、ええ…？』

『いいから早く！』

慌ててお母さんが準備している間に私は親友の一人に連絡を入れました。

『真姫ちゃん！？』

『は、花陽？ どうしたの急に』

『ゴメン説明は後！ 今すぐ患者さん運ぶから結姫さんに伝えて！』

『——いくら友達の頼みでもそんな急には無理よ』

『そんな『と言いたいところだけど』』

『ママなら今うちにいるのよね。つてああちよつと私の携帯——

『花陽ちゃん、その患者さん事故と病気どっち？』

『多分病気です！ でもウイルスとかでは無いと思う！』

『わかつたわ。すぐにうちに連れてきてちょうだい』

それだけいって結姫さんは電話を切つてしましました。しかし今私のとつては十分でした。

『お母さん！今すぐ真姫ちゃん家に！』

「西木野家にて、

急いで彼方君を真姫ちゃん家に運んだ後すぐに結姫さんに診てもらいました。私が予想した通り彼方君は拒食症でした。

しばらく彼方君のカウンセリングをしたいとの事でお母さんには先に帰つてもらい私と真姫ちゃんは廊下で待つてます。

『さて、そろそろ話してくれても良いわよね？』

『そうだね…じゃあちよつと長くなるけどしつかり聞いてね』

そこから私は細かく、出来るだけ丁寧に説明しました。あの少年は江口彼方という名前で父親は幼いときにはなくなつて母がつい最近癌でなくなつたこと、その少年と自分は従兄弟であること、など知る限りの情報を全て。

『…理解はしたわ。ただ納得はしかねるわね』

『言いたいことはわかるよ、いくらなんでも辛すぎる…』

その後はお互に無言でした。

しばらくすると彼方君が出てきました。来たときよりもだいぶ改善したように見えたのは結姫さんのカウンセリングのおかげでしようか？

『それじゃあ江口君、しつかり食べるのよ』

『…善処します』

『花陽ちゃん、江口君のこと、頼んだわよ』

『…はい』

こうして私達は帰路に着きました。

『なあ、かよねえ』

『なあに？』

『西木野先生、おもしろい人だな』

『…そうだね』

『…ご飯、食べられるかな』

『…食べないとダメだよ』

『うん…』

その後、何なら食べれるのか試行錯誤したところサンドイッチとみかんなら戻さないことがわかりました。なぜだかは今でもわかりませんが：

恥ずかしい話、私一人には彼方君の心をほぐしてあげることは出来ませんでした。 μ , sを立ち上げた時の穂乃果ちゃんのファイト魂を胸に何度も話しかけましたが応じてくれません…まともに会話をしたのはあの夜だけです。

でも私には心強い友達がいます。絵里ちゃんと会う予定があつたときには彼方君も連れていきました。

『絵里ちゃん、彼方君呼んでくれてありがとうございます。ほら彼方君自己紹介』

『…………ども。江口、彼方です。よろしく、お願ひします。』

えっと、と彼方君が口を開く前に絵里ちゃんが割り込みました。『はじめまして。私は絵瀬絵里。花陽から事情なら聞いてるから話さなくていいわよ?』

そうなんです。多分彼方君は周りを遠ざけるためにわざと身の上の話をしようとしています。なのであらかじめ皆には話を通しておきました。皆の反応は実に多種多様で…

『なら私達が友達になろうよ！悲しい過去は楽しい未来で塗り潰せばいいんだよ！』

『…大変だったのね。何故かしら、私ったら彼方君の事を助けたがってる…』

：誰が誰だかは今更言うまでもありませんがとにかく μ , sの皆さんで彼方君を助けることにしたんです。

恨みがましい視線を受けましたがあえてスルーします。

『今から私達が貴方の家族よ。だから困つたら遠慮せずに頼りなさい！』

『…………家族、ですか。ずいぶん勝手に言つてくれますね』

『そんな簡単に家族とか言わないでくださいよ！』

いきなり彼方君は大声で叫びました。

『か、彼方君？』

『うるさいな…かよねえは黙つてろよ!』

『…なあ、事情聞いてんならわかってるだろ? クソ親父は母さんと俺をいじめるだけいじめてほつたらかし。母さんは俺なんかのために自分を殺して金を稼いだんだ! 俺はただ母さんが死に物狂いで稼いだ金を浪費させただけなんだ! それでも母さんは俺のことを世界で一番愛してくれたんだ! 俺にとつて家族は母さんだけなんだよ! 赤の他人が簡単に口にするな!! パシソッ!!!』

彼方君が叫び終わると同時に絵里ちゃんは彼方君をはたきました。『いい加減にしなさい! いつまでそうやつてお母さんに固執してんのよ!? 確かに軽はずみに家族だなんて言つた私にも非はあるわ。でもね、赤の他人だなんて呼ばないで欲しいの。』

『…え?』

今回彼方君を絵里ちゃんの元に連れてきたのには理由があります。それは、絵里ちゃんの家庭状況が彼方君と少し似ていたからです。『私ね、お母さんとお父さんと最後に会つたのつてもう七年以上前なの。』

『でも生きてるんだろう…なら』

『生きてるか生きてないかなんてこの際はつきり言つてどうでもいいわ。すぐそばに親がいない事に変わりはないもの…』

絵里ちゃんのご両親はロシアで働いていて現在は日本にいません。彼方君の話をしたときも自分と状況が似てるから、と真っ先に会わせてほしいといつてくれました。

『もちろん私の辛さなんて彼方君の比じゃないと思う。あなたの方がよっぽど辛いはずだもの…だからね? 私は貴方と仲良くなりたいの。そんな私とあなただから仲良くなりたいの…』

『…すみませんでした。えつと…絵瀬さん』

『絵里でいいわよ♪』

『じゃあ、絵里姉さん…とかでいいですかね?』

『もちろん! 私弟欲しかったのよねえ…』

やつぱり絵里ちゃんに任せて正解だったみたいですね。彼方君は大

分心を開いてくれたみたいで表情に少し抑揚も見えて心底ほつとしました。

それからというもの彼方君は性格も人格もガラリと変わりました。
μ, sの皆が暇を見つけては彼方君の所に来てくれたり一緒に遊んだりして空白だった十年近くを取り戻してくれたからだと思います。

「また彼方君と遊びたいなあ…」

「ならこんど遊びにいくにや！ 静岡ならわりと近いし！」

「じゃあ皆さんにも連絡入れておくね！」

彼方君、こつちの皆は相変わらずです。向こうでも元気によつてることを願います。

第七話 ～沼津の彼方に～

～前回のあらすじ～

彼方はかなり情緒不安定だったみたい。そして今の彼方を作るにあたって絵里の協力が大きかつたらしい：

～そして舞台は静岡県に戻る～

「…とりあえず状況を整理させてください。」

「え、ええ…」

この様子を見る限りだと生徒会長、μ、s 大好きなんだろうなあ：「えーつまりあなたの従姉妹にあたる人がかの有名な小泉花陽であなたはμ、s の皆さんにお世話になつた、と」

「はい…まんまですがね」

「なんと…なんと羨ましい！あの存在そのものが伝説のμ、s が親族にいるだけでなく面識もあつたというなんて！」

予想以上の食い付きだこりや…ちょっととした話題提供のつもりが変なボタンを押しちしまつたみたいだ。押してポチリ～

「生徒会長…μ、s 大好きなんですね。ちなみに推しメンはいたります？」

「私はエリーチカが大好きなんですの！生徒会長を務めながらスクールアイドルを兼任するその賢さ！日が覚めるような鮮やかな金髪！そして透き通る歌声！完璧ですわ…まさにKKE！」

よかつたな絵里ねえ。外部からはこう見られてたみたいだぜ。内部でのあんなポンコツやこんなポンコツは絵里ねえのささやかな名譽のために黙つておくとしよう。

「あーそういうえば今度μ、s 全員で家に来るみたいなこと言つてしまつたね～」

「…………つ?! いつ、いつですの?! 最高級のおもてなしをさせてもらいますわ！」

「いつかはわかりませんけど…………えつとですね、近いです…」「…はっ?! // // //

自分の好きな事になると回りが見えなくなるつて誰かにそつくりだよなあ。ダレカタスケテー

「まあ来たら連絡しますよ。多分かよねえ達も喜ぶと思いますし」

「なら電話番号を交換しませんか？毎回うちまで来てもらうのも悪いですしつ…」

「本来ならマリーの指示が無ければうちに帰つてたところですからね：いいですよ。番号、交換しましようか」

一応高校に入つてからスマホというものを使つてゐるがいまだに使いこなせない。全部ダイヤさんに任せてしまつてなんとも情けないという：

そのあともμ, sについてダイヤさんと日が暮れるまでたくさん話した。やつとの思いで家路についた時は既に6時を過ぎていた。
come back!俺の休日!

♪その日の夜♪

…よくよく考えると今日は色々ありすぎましたわ。とある事情から我が浦の星女学院に男子が来る事を鞠莉さんから聞かされた上にその男子をうちに向かわせたと言うのですから。

この辺りに男性は珍しく多分、本来なら緊張して焦つてしまつたでしょう。ですが今日の私は話すだけに留まらず連絡先の交換までしてしまつたのです…！

そこまで出来たのもあの少年とμ, sの話で盛り上がれたからですね。フフツ…：

今度ルビイにも紹介してあげようかしら。あの子はかよちん推しだすからきっと心底驚くんでしょうね…――

本音を言つてしまえば今日だつてルビイも呼んで一緒に話したかつた。しかし、それはもうできない――

二年前の、あの出来事以来私はスクールアイドルを”嫌い”だと振る舞つてます。果南さんがあんなつてしまつた今、胸を張つてスクールアイドルが好きだなんて言えませんからね。でも彼の前だけなら本当の自分をさらけ出してしまつてもいいのでしょうか？私だつて

人間なんです。いつも気を張つてるのはひどく疲れるのですよ…。

「翌日」

今日は浦女の入学式の前日。つまり最後の休日である。そもそも休日とは休む日と書いて休日である。休まなければ休日じゃない。ということでニコニコ動画を開いた。お気に入り登録してある動画を選ぶ。

『さて、今日も魔界からの使者、堕天使ヨハネが貴方を地獄の底へ誘うわ…』

堕天使ヨハネ、この娘の動画が俺のお気に入りだ。素なのかキャラづくりしてんのかは謎だが普通に可愛い。それに好きな事に全力で取り組む姿勢は嫌いじゃないしな。

その他の動画も一通り目を通してたら午後になつていた。昼飯を作るのも面倒なので沼津まで行くことにした。

：ほどなくして沼津に着いたがここでアクシデント発生。たまたま通りかかった本屋さんの前で二人の女の子がこれでもかというくらいの文庫本を抱えていた。おいおい大丈夫か…？

「る、ルビイちゃん大丈夫ずら？」

「う…うん…なん、とか…！」

流石に見てられなくなつた俺はちょっと手伝いに行くことにした。これを無視するのは夢見がわるい気がするしな。

「なあ、そこのお一方。良ければ手伝うけど…」

赤髪ツインテールの女の子の肩をつついて話しかけた。しかしこれがいけなかつた。

「えつ…」

「あつ」

「ぴぎやああああああああああああああああああああああああああ!!」

なんとびっくり。この小さいからだのどこからそんなスピーカーみたいな爆音だせるんだ…！

俺の鼓膜さんが悲鳴をあげる。

『ヤバい。これはヤバい!』

と。

「ま、待つてストップ！すまん、悪かつた！」

「二人ともお、落ち着くぞら！」

…程なくして俺達はどうにか落ち着きを取り戻した。

「さつきはいきなり話しかけて悪かつたね」

「いえいえ…ほらルビイちゃんも」

「びぎつ…え、えつとお…そのお…」

…確かにいきなり話しかけてビックリさせたのはこっちがわるい
けどさ、そこまで怯えますかね？あれ、目から熱いものが…

「ち、ちがうんです！ルビイちゃんは男の人が苦手で…」

「ああーそういうことね。良かつたー…」

危うく引きこもるところだつたぜ…

「あ、おらは国木田花丸っていうぞら」

「俺は江口彼方だ。で、そちらの赤髪の子は？」

…ダメだ。花丸ちゃんを盾にして全然出てくる気配が無い。

「えっと、この子は黒澤ルビイって言います。」

そこまで聞いてはて？と思う。黒澤つてもしかして…

「あれ、君つてダイヤさんの妹？」

「お、お姉ちゃんを知ってるんですか!?」

「お、おう…」

急に元気になつたルビイちゃん。どうやらこちらから話題を振ればしつかり答えてくれるみたいだ。

「この間ダイヤさんに会う用事があつてね。そこで話してから顔見知りになつたんだ。

それより荷物があつたんだろう？手伝うよ

「ありがとうございます！ちょっと買いすぎてしまつたぞ…」

ちよつと…？文庫本軽く50冊を越えてる現状でちよつとですか

!?

「よいしょつと…あ、黒澤の分俺が持つよ。大変なんだろ？」

「え、いいんですか…？」

「当たり前だ。目の前で怪我でもされたらダイヤさんに申し訳立た

ないだろ?」

いくらコミュ症とは言え一般教養くらいは備えてる。ありがとう

海未さん：

「さーて、じゃあ時間無くなっちゃうし早く行こうか」

「は、はい!」

こうして俺は国木田の家であるというお寺まで付き添つた。そして昼飯を食べ損ねた上にルビイちゃんを怖がらせないようにあの手この手考えてたらあつという間に1日なんて過ぎてしまった…

サラバ、俺のholiday：

第八話 ～浦女の彼方に～

～前回のあらすじ～

ダイヤさんと、Sについて語り明かしてルビイちゃんにピギラれた。案の定ゆっくり休むことなんてできなかつた：

朝7時。いつもの起床時間だ。まだ若干寒さが残るこの時間、言うことを聞かない体に鞭打つてのそのそ起き上がつた。

「ふあ…あねむい…だが起きねば…」

こういつた生活習慣は海未さんが徹底して叩き込んでくれたので嫌でも定刻には起きてしまうのだ。ありがたいやら恨みがましいやら…

「…飯でも作るか」

おんぼろ冷蔵庫の中を物色してると家の外から声がした。

「おはよーございまーす！」

「あら曜ちゃん、おはよう」

ああ、渡辺か…にしても早いなあいつ。どんだけ高海のこと好きなんだよ。

とりあえず卵とほうれん草があつた。こいつらで卵焼きでも作るか。あとは白米と昨日の味噌汁でいいかな。

卵焼きをさくっと作つて簡単な朝御飯を済ませた。

「7時半か…そろそろ行かねば」

7時45分にはバスがくるので少し早めに家を出ることにした。

「…いってきます」

普段はあんまり言わないけどなんとなく、言つてみた。いってらっしゃい、と言われた気がした。

朝の気持ちいい風を浴びながらバス停まで歩く。だがそんなのどかな雰囲気とは裏腹に気分はブルーだつた。本来ならいるはず無い男子。それが突如乙女の花園に現れたら女子はどう思うか？それをどうしても考えてしまうためなかなか気分は晴れなかつた。

一人悶々としてるといつの間にかバス停に着いた。そこではて？

と思う。

「高海と渡辺まだ来てなかつたのか？」

そう、今バス停には俺以外に客はなかつたのだ。少なくとも朝渡辺の声が聞こえたので万が一にも遅れることはないだろうが：

バスが来たので乗り込んだ。仕方ないので一人でちよつとばかしうたた寝しようと目を閉じたら発車直前になつてあの二人が飛び込んできた。

「待つてくださいー！」

おいおいマジかよ…

「はあ…はあ…どーにか間に合つた…」

「全く…千歌ちゃんの…はあ…せいだからね…」

そんなはあはあ言わないで下さいませんかねちょっとびり遅れて思春期来てる俺はあんな妄想やこんな妄想しちゃうからマジで！

「…よう、お二人さん」

「彼方君!？」

「なんで驚いてんだよ…」

「え、だつて彼方君女子校行くつて」

「浦の星女学院も女子校だろ。しかも名前だつてあのとき出したはずが？」

「そ、そعدつけ」

まあ、あん時は俺も二人も冷静じやなかつたし忘れてても仕方ないつちや仕方ない。

「それよりなんでこんな走つてきたんだ？朝渡辺の声が聞こえた時はまだ7時くらいだつたはずだが？」

「え、なんで知ってるの…つてそういうえば千歌ちゃんちの目の前だつたね彼方君ち

「これからはマジでそういう疑惑もんは勘弁な…冗談抜きで死んでしまう」

「これだよこれ！」

「んあ？スクールアイドル陪？」

そう言つて高海が見せてきたチラシの束には

『スクールアイドル部』

と書かれていた。ずいぶん懐かしい名前だな…いや、最近ダイヤさんと喋つたつけ。

「へえ…作るのか？」

「うん！私ね、μ,sに憧れてるんだ！だからμ,sみたいになりたいって、輝きたいって思つたの！」

こう宣言した時の高海の目に曇りはなかつた。覚悟はあるんだろう。

しかしだからと言つて素直に賛同はしかねた。

「どうしたの彼方君？千歌ちゃんの案にあんまり納得いつてない？」

「いや、なんというかスクールアイドルを始めることについては特にないんだが…」

「だが？」

「…いや、なんでもない。」

「??」

今俺が思つた事は言わない方が良いだろう。せつかく頑張つている高海に水を差すような事をしたくない。

「まあやるなら応援はする。頑張れよ。」

「うん！」

『次は浦の星女学院高校前→浦の星女学院高校前→』

「お、そろそろか。」

「学校で変なことしないでよ？」

「彼方君チキンっぽいし大丈夫だよ～」

「変なこと起こすの前提で話すのやめてね…」

というか渡辺チキン言うな。いや、わかつてはいるけど…

そして俺達はバスを降りた。

「…あれ、学校は？」

バスを降りたはいいが肝心の学校が無い。あるのはだだつ広い坂道だけ。

「「ふふふ…」」

「…なんだよ」

「いや、まあ東京から来たんじゃわからないよね♪」

「うんうん♪」

少なくとも俺は正解を当てたわけでは無さそうだ。明らかに高海と渡辺は俺をからかつてる。

「なんだよ、もつたいぶんないで早く教えてくれ」

「実はね、浦女は地下にあるんだよ！」

「え、嘘!?」

「そりやあ初めて見たらわかんないよね♪」

そりやそりや！マジか、田舎の学校とバカに出来ないな…：

「じゃあとつと行こうぜー。エレベーターかなんかあんのかな…」

しかし後ろから足音は聞こえない。

「「ふつ…くくつ…」」

…代わりに忍び笑いが聞こえてきた。忍べてねえよ。

「いやー、ゴメンゴメン！彼方君の反応が予想以上におもしろくてさー」

「…勘弁してくれよマジで」

結局浦の星女学院はこの坂道を登りきつた先にあることがわかつた。というかよく考えたら地下にある学校とか聞いたことねえんだよな…。

「はあ…なんかバカバカしくなつてきた。さつさと職員室行こ。」
スクールアイドル部のチラシ配りがあるとかで二人は走つてどつかに行つた。けどまあ二人のおかげで緊張はいくらかほどけたかな。
さあーて、じゃあいつちよ頑張りますかね！

「おまけ♪

俺と別れる前渡辺のやつ耳元でこう言つてきた。

「緊張ほぐれたでしょ？」

ヨーソロー可愛すぎか。

第二章 うきつと彼は何かを求めている、

第九話 う 転入の彼方に、

「前回のあらすじ、

　よううちに騙されて浦女が地下にあると思つてた彼方。地下にある学校つて確かにかつこいいけど…

　：視線が痛い。高海達と別れてからといふもののにかく見られる。きやー僕ちゃん人気者ー（棒）

　どうにかして職員室に到着。

「失礼します。この度浦の星女学院に編入することになりました江口彼方です。」

「おー君が江口君ね。私は今日から君の担任の沢木狐々音。よろしくね♪」

　そう言いながら現れたのは若干つり目がちな女性だつた。

「にしても本当に男の子だね…一応上から話は聞いてたけどやつぱり緊張するなあ」

「それはお互い様ですよ…ここに来るまで不審者を見るような目で見られましたから」

「まあこの地域はそもそも男性が少ないからね。めずらしがつてるだけだと思うよー」

「だといいんですがねえ」

　そのあと学校での諸注意などを聞いてからホームルームが始まるまでは自由時間とのことなのでダイヤさんに挨拶に行くことにした。階段を登つて生徒会室を見つけ歩いていくとなにやら声が聞こえてきた。

「——いなければ——しかねます！」

「——なあ！」

「——からじや声がよく聞こえないな。もうちょい近づこう。」

「渡辺じやんか。ここでなにしてるんだ?」

「ありや、彼方君。」

何故か生徒会室の前でドアにべつたりくつついでた。

「いやあ中で千歌ちゃんと生徒会長がね…」

「はい?」

そう言われて生徒会室の中を覗くと…

「私が生徒会長である限りスクールアイドル部は認めないからです！」

いや、何があつたんだ…

しばらくすると高海が出てきた。

「はあ…ダメだつて

「そりやそうだよ…」

「渡辺から大方の事情は聞いた。高海、お前アホだな。」

「だーつてえ…」

つまり事情はこうだ。スクールアイドル部自体浦女には存在してなかつたらしい。じやあ作ろうと立ち上げたわけだが部員が足りないので集める事にした。だがその行動 자체に問題があつた。

ただでさえ入学者数が年々減つていて新入生が貴重なのにまだ部ですらないスクールアイドル部（仮）が部員をかつさらつていくのは如何なものかと。

「これはダイヤさんの方が言つてることは正しいんじゃないかな?」

「でも部員集めてきてもスクールアイドル部は認めない!って言われただよー?なんで…」

すると渡辺がばつが悪そうな顔でボソツと言つてきた。

「…嫌い、みたい」

「え?」

「前にクラスの子がやろうとした時も断られたみたいで…」

うむ…これはいさかおかしい。こないだ会つた時なんて、sの話でえらく盛り上がつたんだ。嫌いなはず無かろう。とんでもなく矛盾してる…一体なんで…

「あ、そろそろホームルーム始まる!」

「マジか。また職員室戻らないと…」

取り敢えず今は難しい問題よりも目先の事に集中せねば。
「じゃあまたあとで！」

「うん、あとでねー！」

高海達と別れて職員室に向かうと既に沢木先生が出て来ていた。

「あ、沢木先生！お待たせしてスミマセン。」

「ほんとだよー1 a d yを待たせるなんて紳士失格だゾ？」

「いや紳士つて…」

しかも1 a d yの発音が最高にかつこよかつた。この人英語教師
なんだろうなー…：

「じゃ、行こつか！」

「はい！」

しばらく歩いて教室の前につく。

「じゃあ合図したら入つてきてね」

「承知しますた」

まあ、転校生だつたら定番だな。

とりあえず外から先生の自己紹介を聞くか。

「皆何ヵ月かぶりだねーー応今年もこのクラスの担任やる事になつた
現国の中澤木だよん。よろびくびくーー」

はああああ?!なにあの人現国担当なの?!英語じゃないの?!騙された
た:

「さーて皆顔見知りだし本当ならこのまま色々連絡して終わりなんだ
けど今日は新しい仲間が入つてくるんだーー」

先生のその発言をきっかけにクラス全体がザワザワはじめた。
何故か高坂さんが持つてた賭博默示録みたいに。ほんとなんであれ
持つてたんだあれ…：

「じゃあ入つてきてーー」

緊張した時は軽く深呼吸してから膝を叩けつて前に絵里ねえから
言われたことがあった。さて、じゃあ深呼吸して膝を叩いていきます
か!

扉を引いて堂々と教室に入つた。

「はじめまして。この春からこの学校に転入してきました江口彼方です。男子なので皆さんに迷惑をかける事になりますが何卒お願ひします。」

そう言つて頭を下げた。これは無難にすんだはずだ。

…おかしいな、拍手がない。こういうのって普通どんなに滑つてもつまんなくとも拍手くらいはするもんだよね？

恐る恐る顔を上げた瞬間だつた。

「きやあああああああ！」

「…え？」

やつぱり普通に考えて受け入れられないよなあ…

「安心していいよ。あれはみんな好意の悲鳴だから。」

「はあ…」

なんだかよくわからんけどどりあえず失敗はしなかつたみたいだつた。

「ヤバい、超かっこよくない!?」

「声、声がたまんないわ…」

「私、神様の存在を一生信じ続けます。」

「首輪つけて調教したいわあ」

おい最後言つたの！それはダメなやつだ！このクラスで大丈夫なのか俺…

「はいはい皆静かにねー。じゃあ彼方クンは…曜ちゃんの右ね！」

「はい…つてえ？」

「曜ちゃんつてまさか…

「彼方君やつと気づいた…」

「渡辺！マジか、一緒のクラスだつたとは…」

「私もだからねー！」

「高海もかよ…」

でも少しだけ安心した。顔見知りがいるだけでかなり心強い。

しかし、そう思つたのも束の間だつた。先生が簡単に連絡を済ました後のことだ。

一応こんなでも転入生。そりやあ多少の質問攻めは覚悟してた

さ。それにこの辺りじやあんまりいない男子だ。相当コミュ力があるやつじやないと話しかけるなんてそうそうないだろうと思つてた。

しかし、いつだつてイレギュラーは起こりうる。

先生が教室出た途端に横から高海のやつが

「彼方君に質問がある人じゃんじゃん来てね！」

つて煽りやがつた。そのせいで今はと言うと…

「好きな食べ物は!?」

「み、みかんとサンドイッチ」

「どこから来たの!?」

「東京だ」

「彼女は!?」

「いたらよかつたなあ…」

「スリーサイズは!?」

「上から85、59、73」

「私、負けた…」

「嘘だよ（汗）」

女子にだつてこんなボンキユツボンな人いないだろう…

とまあこんな感じに四方八方から質問が飛んでくる次第である。

おのれ高海のやつ…！

結局、俺が帰れたのは一時間も後の事だつた。

＼おまけ＼

「私のペツトになつてください」

「丁重にオコトワリシマスッ」

さつき「ペツトにしたい…ハアハア」つて言つてたやつだ。お前マジでだれだよ…

第十話 ～昼飯の彼方に～

「前回のあらすじ」

亡き母のコネというか根回しやらで浦の星女学院に転入してきた彼方。彼は女子に人気だった事に気づいていない…。

「疲れた…」

帰つてからすぐに畳に寝転がる。まだ昼下がりだというのにこの疲労感は一体なんなんだ…

浦の星女学院転入一日目。高海と渡辺のせいで偉く疲れた。

「さて、昼飯はどうすつかな…」

思考を巡らせてると高海から電話がかかってきた。

『あ、もしもし？ 彼方君？』

「なんだ高海か…」

『なんだってなによーう！』

ああプリプリ怒つていらつしやる姿が想像できる。冷たい泉に素足を浸したりはしない。

「まあ怒んなよ。 んで何用？」

『あ、 そうそう。 これから曜ちゃん呼んでうちでお昼食べようと思つてるんだけど… 彼方君も一緒にどう？』

『え、 マジでいいの？』

『うん♪ マジもマジ。 マージマジ！』

「マジーロ！」

マージマジとか言つてくるからフリなのかと思つた。魔法戦隊な。

『…は？』

が、違つたらしい。 というか恥ずかしさで危うく母さんの所へ逝つちまうところだつたぜ…

『…………いや、 なんでもない。 ジヤあ何時に十千万行けばよろしくて？』

『一時くらいには来てね！』

「ほいほーい」

そこで電話は切れた。やつた、昼飯代が浮いた！しかしまあ…あれだ。これからはフリかフリじゃないかどうかをしつかり見極めていこう。恥ずかしい…。

墮天使ヨハネの動画を見ながら時間を潰しているとそろそろ出かける時間になつた。

「んじや行くか」

家のすぐ裏なので歩いて一分かからない。

「こんにちはー」

「あ、彼方君！いらつしゃい！」

「お？千歌、お前男の知り合いいたの？」

玄関から入ると見知らぬお姉さんがいた。志満さんはもつとこう…おしとやかな感じだつたから違うし一体…

「あれ、美渡ねえ彼方君と会うの初めてだつけ？ほら、こないだ美味しいバームクーヘンくれた…」

「あーー！あのうまいバームクーヘンくれた子か！」

「どうも、はじめまして。春からこの裏に住んでます江口彼方です。」

「ほあー…確かに志満から聞いてた通り礼儀正しい。千歌と同い年だなんて想像できねえ…」

「ちよつと!?みんなでよつてたかつてミソッカス扱いしないでよー！」

！

「あ、あたしは千歌の姉の高海美渡だ。よろしく！」

「はい、よろしくお願ひします」

挨拶を交わしたところで美渡さんがずいづいと身を寄せてきた。

「…ちなみに、千歌とはデキてるのかな？かな？」

「ちよおつと美渡ねえ！何聞いてるのさ！//／＼

まだ会つて1ヶ月もたつてないのに何考えてるんだこの人…

「確かに高海は可愛いが付き合うとか浮わついた話は考えたことも無かつたな…」

「ありや、それじゃあ脈なしか：つまんないの一！」

「わ、私で遊ばないでよー！／＼＼＼＼

「そうよ、あんまり千歌ちゃんで遊ばないの」

高海が遊ばれないと志満さんが降りてきた。ほう、三姉妹揃つたな。

「あ、志満さん。ご無沙汰します」

「彼方君いらつしやい。ご飯そろそろ出来るから部屋に来てね？」

「はーい」

高海と美渡さんが行儀よく返事を返す。すると玄関がまた開いた。

「こんにちはー！」

「あら曜ちゃん、いらつしやい！ご飯出来るから皆と部屋行つてちようだいね。」

「はーい」

こちらも行儀よく返事。志満さんがなんだか皆のお母さんみたいだつた。

「よつす」

「お、彼方君来てたんだ！」

「まあな：高海に呼ばれて。」

「志満さんのご飯スッゴイ美味しいんだよ！」

「そりや楽しみだ。」

そうこうしてると奥から鼻腔をくすぐる香ばしい匂いがたちこめてきた。

「じゃあ奥の部屋行こつか」

「だな」

しばらく歩いて部屋に入るとあらビックリ！お昼にしてはちょっと豪勢なメニューが並んでいるじゃありませんか！

メニューは白米に味噌汁、麻婆豆腐にピクルスの盛り合わせ。腹が減つて仕方なかつた俺の胃袋には暴力的なまでに響く。

「お、おお：スゲエ！」

「ふつふーん！志満ねえの料理はスゴいだろう！」

「千歌ちゃんが作ったわけじやないのにねえ…」

渡辺が苦笑いでボヤく。本當だ、なぜお前が得意氣なんだ…

「さあ、早く食べちゃいなさい。覚めちゃつたら美味しくなくなるわよ？」

「「「「いただきまーす!」」「」」

「はい、召し上がれ♪」

まずはメインのおかずである麻婆豆腐を一口食べてみた。

「ん…!?これは！」

「彼方君どう?」

「うまい、ウマイです!」これ丸〇屋のやつより断然ウマイ!手作りですか!?

「まあね。おきに召したようで何よりだわ♪」

「はあ…すげえ。俺志満さんの飯だつたら毎日だつて飽きません。なんなら作つてほしいまであります!」

自分の素直な感想を述べた瞬間、さつきまで和気藹々として食卓の場が急にぴりついた。

急に志満さんは顔を赤くしながらぼそぼそ呟いた。

「あ、あの…私まだそういうのはちょっと…／＼／＼／まずは、お付き合いしてからというかその…／＼／＼／

「あ、あれ? 志満さん? どうしたんですかー?」

心配になつて問い合わせてみると大きな溜め息3つ。：俺がなんかしたんですね?

「彼方君が志満ねえを口説いたことも驚きだけどまさかの無意識

⋮

「志満はああいうの慣れてないからなー」

「彼方君女の子の敵だね。」

「なんでだよつ!」

しばらく談笑しながら飯を食つてると渡辺が高海に質問していた。

「ねえ千歌ちゃん。スクールアイドル、本氣でやるの?」

「うん! だつて、今まで何にもやつてこなかつた私が初めてなにかやりたいつて思えたんだもん!」

「はあ…お前まだ言つてるの? こんな田舎町じや無理だつつの」

どうやら美渡さんは高海のスクールアイドル活動に対して後ろ向

きな考え方らしい。確かに、いい場所ではあるのだがここは確かに田舎なのだ。美渡さんの意見も一理ある。

「もう、美渡つたらまた水を差すような事を…」

(＊、△、）ノ!!↑こんな感じの顔で怒る志満さん。可愛い。志満さんは素直に応援するらしい。

「あ、じゃあ彼方君はどう思うの？」

麻婆豆腐をもしやもしや食べながら考えを巡らせてると渡辺が唐突に聞いてきた。

「俺？俺は――」

もう隠さなくともいいかと一瞬考えた。高海の掲げる目標である「μ, s の様に輝きたい」というものが俺には酷くあぶなかつしく写るのだ。約二年間俺は μ, s の皆と過ごしてきた中で彼女達の苦労談はいくつも聞いてきた。そんな俺だからわかる。

この目標は高過ぎると。

別にスクールアイドルに反対なわけでは無いのだ。その目標がいけない。

だが覚悟はあるのだろう。高海の語り草や目を見れば一目でわかる。だから、この事を言つて良いのか酷く迷つてるのだ。

「…いいとおもうぞ。そもそも俺が口出しするような事じやないしな」

結局色々考えた挙げ句俺は自分の考えを封印した。実際俺が口出しして良いことでは無さそうな事は確かだからな。

「本当!?ほら、彼方君も良いつて言つてくれてるよ?」

「えー…?」

「よかつたわねえ、千歌ちゃん」

「…………」

高海三姉妹がキヤツキヤウフフ（一部何か違う）してるなか、俺の微妙な返事を見逃さない人がいることに俺はまだ気付かなかつた。

高海の家を出た後家の手伝いがあるとかで高海はそのまま家に残つた。つまり、今俺は渡辺と二人きりである。

「ねえ、彼方君何か隠してるでしょ？」
でも、あまりいい雰囲気とは言い難かつた。

第十一話 ～思惑の彼方に～

「前回のあらすじ」

十千万でお昼ご飯を食べた彼方。志満さんを無意識に口説くというなんともデンジヤラスな事をしでかした。なにやつてんだお前：

「何か隠してるでしょ？」

十千万を出た後渡辺にそう言われた。

「…………」

俺は何も言えなかつた。実際に隠しているのは事実だから下手に肯定するわけにも否定するわけにもいかなかつたのだ。

「別に教えてほしい訳じやないんだけどさ……多分、彼方君千歌ちゃんのスクールアイドル活動に賛成じやないでしょ？」

そう話す渡辺の口調は少し悲しそうだつた。喋つてしまつてもあまり問題がないだけ、勝手に黙つてることに罪悪感を覚えてしまつた

⋮

しかしよく考えてみよう。渡辺はスクールアイドル活動に参加する訳じやないので。ならば言つてしまつても問題ないのではないか。

「……なあ、お前これからスクールアイドル活動に参加する気はあるか？」

「唐突だなあ……そうだね、今のところは。なんで？」

「話すよ。お前らに隠している事を」

「ふーん……スクールアイドルやるとなんか都合悪いんだ？」

「や、そういうことじやなくてな……」

「……わかってるよ。じゃあ話して？」

そして俺は母さんの事以外で初めての過去話をする事になつたのだ。

自分に、Sの親戚がいて母さんが死んでからはそこでお世話をなつていたこと、その全員と知り合いであることを。

「ほへえ……まさか、Sの全員が親戚&知り合いだつたなんて……」

「まあ、本題にその事が大きく関係しているんだがな」

そして俺は大きく息を吐いてからその言葉を口にした。

「俺は高海の目標が変わらない限り、多分素直に応援できない」

「…………」

渡辺は無言だ。一体何を考えているのか、今の俺にはわかりかねる。その無言を続きを喋れという催促に解釈する事にした。

「直接あの人達の活動を見てきた訳じゃない。それでも色々な苦労話を聞いたりアルバムを見せてもらつたりするとわかるんだ。この人達は並々ならぬ努力でこの栄光・高海の言うところの輝きつてやつを手にしたんだと。」

「…何個か訂正」

今まで黙っていた渡辺はいきなり口を開いた。

「彼方君が考えているμ、sの様について考えと千歌ちゃんが考えているμ、sの様について多分違うと思うよ？」

「へえ…そのこころは？」

「彼方君はμ、sの様にラブライブ！で優勝するつて思つてる。違う？」

「…違いない」

「でも千歌ちゃんはμ、sの様に皆を照らしたい、笑顔にさせたい、幸せにしたいって思つてるんじやないかな？」

なるほど、それは盲点だった。別にラブライブ！で優勝する事が全てではない。

「そういう意味なら変にヘソを曲げなくとも良いんじやない？」

「別にヘソ曲げてたわけじや…ただ高すぎる目標は身を滅ぼすと思つただけだ。それがなんとなく嫌で…」

少なくとも俺は彼女らを心配していたのだと思う。初めて出来た友達だ。心配するなんて当たり前だろう。

「…………！」

「な、なんだよ」

「いや、なんというか…会つて間もない千歌ちゃんの事を随分心配しているなあ…と」

「そ、そりやあお前らは初めて出来た友達らしい友達というかなん

「とかでまあ心配しますよね」

「急に込み上げた恥ずかしさからなんとなく捲し立ててしまつた：うおなんだこれ恥ずかしい。」

「ふうーん…ま、いいや！じゃあ私は帰るね。バイバーイ！」

「あ、おう…」

「変なことを聞いてきたと思つたらさつさと帰つてしまつた。勝手にヨーソローしてかないでくださいよ…」

「ただまあ…あれだ。良いんじやないかな、とは思えてきた。」

家に帰つたあともう一度具体的には何をするのか考えてみた。俺の思つてることと高海が想つていることは違う。よく考えなくても当たり前だ。俺達は等しく人間であり毎日違う事を考えている。なら、俺のエゴを押し付けるのは間違いだろう。それを言い訳に満足に高海を応援しきれないので個人的にも嫌だつたし気分が良いものでは無かつた。

やはり、友人のやる事は全力で応援したい。むしろこれは考え方によつてはかなり嬉しい事だ。俺の身内であるμ, sに憧れ、自分たちもμ, sのように皆を照らしたいと想つてくれてる。ここまで一人で思案して1つの結論に至つた。そして俺はそれを口にした。

「高海のスクールアイドル活動を全力で応援しよう」

気がつけば空は赤く燃えていた。見よ、東方も赤く燃えている！
さつき決めたこれから的事を渡辺に連絡せねば…というわけで携帯でメッセを送つた。

彼方：なあ

y o u : んー（――）？

彼方：俺高海のスクールアイドル活動応援するよ。

y o u : ほほう…どーゆー風の吹き回し？（？――？）

彼方：まあ色々。説明は超絶めんどくさいので割愛。

y o u : 割愛の意味調べようよ…（――。――）＝3まあいい

や。でも応援つて？

彼方：いわゆるマネージャー的なあれだ。勧誘手伝つたりとか

you : なるほど（。！）じゃあ私も考えてみようかな…

彼方：考える？何を？

you : ひーみーつ (*, A) ♪じゃねー

彼方：お、おう…

考えるて一
体何をた
：

まあいいどう世近いうちにはわかるだろう

じきに日も沈む頃。戸締まりをするために窓に近づくと見覚えがある制服が目に入った。

「また私が買ひ物ー? もーめんどくさーなあ::

次に聞こえてきたのは高海のボヤきだ。買い物を任せられたらしい。

これ以上窓のそばにいると変態に間違われるかねないのですぐに窓をしめて離れた。しかしその数秒後聞き捨てならない声が聞こえた。

「待つて！死ぬ死ぬ！死んじやうから！」

「う」 開口呼
「い」 い字呼
「う」 開口呼
「い」 い字呼

「...」

「「うわああああああ!?」」

その直後だトボリンと一人が海に落せたような音かしたのは

「どー考えてもこれ落ちたよねこれ!?取り敢えずタオルくらいは用意してやるか…あ、あとはライターどつかにあつた気がする」

悲鳴をあげてしまつた。

風邪を引くだろう。

「一体どうなつている、ソレやら…」

彼は人知らず周りを気遣う。

第十二話 一歩の彼方に

「前回のあらすじ」

曜のお陰でしつかり千歌の事を応援できるようになつた彼方。外からは何故か千歌と梨子が落ちる音がした…一体なにが…

家からバスタオルと小さなライター（ただし俺は未成年なので買えない。倉庫にあつたのを拝借してきた）を持って小走りで海岸に向かつた。

「おーいお前ら一生きてるかー」

「あれ、彼方君！どうしたの？」

「え、江口君!？」

見ると予想通り高海と桜内がびしょ濡れだつた。そして何故か桜内は水着になつていた。本当に何故…

「というかあなた、江口君の知り合いなの？」

「そつちこそ！まさか彼方君の知り合いだつたなんて！…へくちつ

「事情説明は後だ。取り敢えずこれで体やら髪やらは拭いとけ。適当なドラム缶とボロ木持つてくるから体拭くならその間な。」

「う、うん…」

二人は驚きの表情を見せながらも俺の言う通り体やらなんやらを拭き始めた。さて、ドラム缶とボロ木つと…

一旦家に戻り倉庫を漁つているといいサイズのドラム缶と木材が見つかつた。いや、本當になんでもあるよな我が家の中庫…大家さん

に感謝感謝。

高海から体拭き終わつたという連絡をもらつたのでまた小走りで海岸に戻つた。

「ほれ、取り敢えずこれで暖をとつとけ」

「ありがとうはあ…暖かい」

「待つている間に大体の話は高海さんから聞いたわ。なんかすごいことになつていてるのね…」

「自分でもそう思う…」

「それより、桜内さん。なんで海に入ろうとしてたの？沖縄じゃないんだから…」

全くだ。一体この時期の海になんの用だというのか。

「海の音を聞きたいの」

「海の音？」

「こりやまた風情が漂う…」

しかし桜内はだんまり。何か言えない事情でもあるのだろうか。

「わーかつたきーかーなーいー…海中の音つてこと？」

「そんなチープな理由なわけ無いだろ：イメージとか想像の話なんじやないか？」

「ふふつ…まあ、そんな感じかな。あのね、私ピアノで曲を作ってるんだけど

「へえ…ピアノで？」

「うん。海の曲を作りたいの。でもうまくいってなくて…海の音を聞けたら何か変わるんじやいかって、そう思つて」

行きの新幹線ではあまりそういう話を聞かなかつたものだからちょっと面白食らつた。

「それで、どこから来たの？」

「…東京」

「東京！わざわざ！」

「わざわざっていうか…」

まあ、桜内がこっちに来たのには複雑な事情がある。おいそれと人に話すわけにはいかない。

「じゃあスクールアイドル知らない？東京つて有名なグループ多いでしょ？」

「えーっと…ごめんなさい。私、そういうの疎くて。江口君も言つてたけどそんなにすごいの？スクールアイドルつて」

「とりあえず見てみて！すごいよ、ナンジャコリヤー！つてなるから」「なんじやこりや？」

「なんじやこりや♪」

そう言つて高海が見せてきた動画。うん、ものすごく見たことあ

る。

「なんというか…普通？あ、ああ悪い意味じやなくてその…アイドルっていうからもつと芸能人みたいなのかと思つて」

「そうか、桜内にはこれが普通に見えたのか。」

少なくとも金髪碧眼のクオーターや高三のくせにツインテにしてる合法ロリとか日本人なのに親子揃つて赤毛の大富豪がいるアイドルグループを普通だとは思わないけど…黙つておこう。

「…だよね」

「え？」

「私ね、普通なの。普通星に生まれた普通星人。」

「普通星に生まれた普通星人、ねえ…」

あのあと桜内達と別れた俺は家に帰つて高海が言つた言葉を思い出していた。そして、また思考をはべらせていた。

かよねえ達は、μ,sは、普通だつたのか。しかしこればっかりは俺の経験でわかるものじやない。とりあえず、かよねえに連絡することにした。

「あ、もしもしかよねえ？」

『彼方君！久しぶりだねー！』

「今大丈夫？」

『大丈夫だけど…どうしたの？』

「ちょっと相談」

そこで高海達のスクールアイドル活動のことは伏せた上でμ,s時代自分たちは普通だという認識があつたかどうかを聞いてみた。

『んー…ただがむしゃらにやつてたからあんまり意識してなかつたかな…』

「え、そうなの？」

『わかりやすく言うとね、弱小野球部が死ぬほど練習して甲子園で優勝する感じ。その選手たちは自分のことを普通じやないなんて思つてないでしょ？』

なるほど、確かにそうだ。「ラブライブ！で優勝した後もだつたのか？」

『そうでありたかつたけどアメリカ行つた上にドームでライブしちやつたからねえ…』

「あはは…」

しばらくお互の近況報告をして電話は終わつた。

一つ、わかつたことがある。

大事なのは普通だと普通じやないとかそういうことじやない。がむしやらに、ひたむきに、一生懸命努力することが何よりも大切であるということだ。

簡単な様に見えて簡単ではないと思う。がむしやらに、ひたむきに、一生懸命努力して全てがどうにかなるなら母さんは助かっていたし世界に戦争は起きないだろう。

だからきっと、俺は彼女達を助けるヒーローの一人でありたいのだと思う。

「ふあ…………あ」

気付いたら寝てたらしくだらしない格好で目覚めた。それでも生活習慣とは乱れないのだから人間よくきてるよな…。

どうにも昨日は頭を使いすぎた。出来ることなら休みが欲しい。「おーい千歌ちやーん！」

が、現実は甘くない。なんならカフェオレのほうが甘いままである。渡辺が高海を起こしに来たみたいだ。

「じゃあ俺もボチボチ学校行くかなー…」

昨日同様適当な朝飯をかきこんでバス停に向かつた。バス停に着くと見慣れた顔が一人発見。

「おつす」

「おはヨーソロー！」

「…朝から元気良いなお前」

「むしろなんで彼方君はそんなにローテンションなのさ」

「低血圧だよ低血圧。朝は弱いんだ」

「よく寝坊しないね‥」

「とある人のお陰だ。それより高海どうした?」

回りを見回すと高海が見当たらない。さつき渡辺が来てたはずだから一緒にいるものだと思つてたんだがな‥

「千歌ちゃんなら大丈夫。そろそろ来るから」

「なに予言?」

「おーい曜ちゃん!」

「嘘だろ!?」

見事渡辺氏の予言的中!さて、どんなタネがあるのやら‥

「彼方君おはよー!なんか曜ちゃんが話があるから先行つてるよつておいてかれただけど‥」

「人聞きのわるい言い方しないでよ‥」

「は、はあ‥んじや俺はいない方が良さそうだな」

「あ、彼方君はここにいて。というかいなきやダメ」

「一体なんの話だというんだ‥修羅場とかマジで勘弁っす。

「千歌ちゃん、私ね。昔から千歌ちゃんと一緒にとにかくやりたいなあつて思つてたの」

「う、うん」

「だからね、しばらく考えてみたんだ」

「‥何をだ?」

「千歌ちゃんが本気なのかどうか」

「‥!」

その言葉にどれ程の重みがあつただろうか。過去になにがあつたかはわかりかねるが高海には感じるものがあつたようだ。

「で、どうだつたんだ?」

だがそんなことはわかりきつていて。高海が本気でスクールアイドル活動を始めたいと思つてゐるなど一日瞭然だつた。それは渡辺も然り。

「だからね、最後にもう一回だけ聞かせて?」

「…本気でスクールアイドル始めるの？」

この質問に対する高海の答えは言うまでもなかつた。

「…うん！だつてある人達も言つてたもん！諦めちゃダメなんだ、その日は絶対来るつて！」

「そつか…じゃあ、私も」

「え？」

私も…？私もつてまさか…！

「私も、スクールアイドルやりたい！千歌ちゃんと一緒に！」

なんてこつたい、まさか渡辺がやりたいなんて言い出すとは…！

「曜ちゃん…！曜ちやーん！」

ガバッと高海が渡辺に抱きつく。全く…ゆりゆりならいいけどがちゆりはフォローしきれないからね俺？

二人がイチャコラしている間にわざと入り込む。

「俺に、一人の手伝いをさせてほしい。」

「へつ？」

「初めて出来た友達が何かやろうつて言つてんだ、全力で応援させてくれ！」

「彼方君まで…！うん！二人とも大歓迎だよ！」

高海が嬉しそうに笑う。心なしか涙ぐんでるようにも見えた。

バスに乗つたあと、今後について楽しそうに話す二人を尻目にふと思つた。

スクールアイドルの頂点から様々な事を学び、スクールアイドルのたまごのサポートをする。最高じゃないか。灰色だった心に、ちょっとだけ色がついてる。ならこれから、俺がもつとたくさんの色でカラフルにしたい。

少年少女はすこしだけ、それでも確實に一歩踏み出した。

第十二話 ～刹那の彼方に～

～前回のあらすじ～

千歌を応援していく事を決めた彼方と曜。曜はメンバーとして、彼方はマネージャーとして。スクールアイドル部（仮）は三人になり新たな一步を踏み出した！

バス停から降りて校舎まで向かう坂道。相変わらず視線をグサグサ刺されながら二人の美少女とのんびり登る。

「私ね、もう一度生徒会長の所に行こうと思う」

「もう一度？」

「うん！」きっと生徒会長は私を試してるんだと思うんだ！まさに壁！」

「お、おう…」

「それは微妙じゃないかな…」

「壁は壊せるし倒せるんだよ！だから！」

高海のやつ絶対ノーブラから取ったな？危うく道中で「Hi Hi Hi！」ってやるところだつたぜ…

「どうなつてもしらないからね…？」

「まあ行くだけ行つてみるか。勇気で未来を見せようぜ」

一瞬高海の顔がパアア…！つてなつた。しまつた若干素が出た…：

そんなこんなでin生徒会室。早速修羅場と化している。さつきから胃がキリキリ鳴いているよ…

「まだ三人しか集まつてないのによく持つてくる気になりましたわねえ…？」

ダイヤさん、綺麗なお顔がひきつります！

「きっと生徒会長は私の事を試してるんですよ？だからわざとこんな風に…」

高海さん？話聞いてました？まだ部員集まつてないんですよ？

「うーーー違いますわ！試してなどいません！」

ダンツ！と机を叩くダイヤさん。ひいつ怖いー…：

「なんですかー！」

机に乗り出す高海。二人とも机をもつと大事に扱えよ…

「なんでもです！」

「うへへへへへへへ！」

幼稚園児の喧嘩かっ！って叫びたくなる程一人の言い合いはレベルが低い。渡辺なんか呆れて物も言えないのか終始苦笑いだ。

机から降りてふあさあつと綺麗な黒髪をなびかせて窓側へ移動するダイヤさん。そして、次の言葉に俺達は次なる壁を感じたのだった。

「大体、作曲できる人はいますの？」

「「…あ」「」

「迂闊だつた…」

「私もすっかり忘れてたよ…」

「どーしょー…」

生徒会室から帰ってきて現在は教室。ダイヤさんによつて作曲の問題が発覚した。

「まあいな…東京なら多少なりともできるやつは見つかるかもしけないけど

「うちみたいな田舎じやーねえ」

「あ、じゃあ彼方君経由でみ——「ストーップ！」

渡辺の言わんとする事を瞬時に察した俺は後ろから渡辺の口をふさいだ。

「んーんーー！／＼／＼

「事情は後で説明する！ととりあえずその案は下げてくれ！」

高海に聞かれるのはまづいので耳元で小声で囁く。

しかしどうしてかさつきから顔を真つ赤にしながらーんーもがいてる。

すると高海が口を遠慮がちに開いた。

「あー…とりあえず曜ちゃん離してあげたら？事情はよくわからぬけど後ろから抱きつかれた挙げ句耳元で囁かれるのは流石に恥ずかしい…／＼／＼

.....おう?

w a i t。状況を確認するんだ江口彼方。

①前にいた渡辺の口をふさぐため後ろから手を回した。

←
②この時点で既に o u t。

←

③その上耳元で、しかも小声で囁く。

←

④そして現在に至る。

「たいつへん申し訳ありませんでしたあ!!!」

全力での謝罪からノータイムで土下座。希さんを怒らせた時によく使つた秘奥義だ。まさかここでも使うことになるなんて…

「び…びつくりしたあ／＼／＼

「いやマジですみません」

「べつ別に大丈夫ダヨ…？嫌じやなかつたしむしろドキドキしたとい

うか…／＼／＼

「お、おう…つてい、嫌じやなかつた…？」

「はっ！／＼／＼待つて待つて今の無し！／＼／＼

「ええ…？なんなんだよ全く…」

いかん、顔が熱い。自分で落とした爆弾なのに自分が一番被害を受けている。無意識こええ…

しかしそれは向こうも同じなのかうつむいたまま顔を赤くしている。

「はいはいそこいちやつかなーい」

「いやついてない！／＼／＼」

「それで作曲だけど…どうしよつか？」

「あまり期待はしないけど…この学校に作曲あたりに精通してゐる人は？」

「…いなあいねえ」

「まあ、いざとなつたら私が！」

そう言つて高海がカバンからだしたのは昨日もらつたばかりの音楽の教科書だつた。

「なんとかする…」

「できる頃には卒業してるとと思う」

「譜面くらいは読めるかもしれないがな。作曲つてかなり高いレベルが求められるらしいし」

「だよね…」

高海が力なくへなへなゝと頃垂れる。ただ作曲者が見つかない場合一から勉強する可能性は捨てきれない。

「はあーい皆座つてー」

三人で悶々としてると沢木先生のほんわかした声が聞こえてきた。「今日から普通に授業始まるから皆頑張るんだよ？そしてもうひとつビッグニュース」

「ビッグニュース？浦の星の地下から汚染水でも染みてきたのか？」

「それ東京の話だから…」

渡辺が呆れながら突っ込む。突っ込んでくれるだけ渡辺はまだ優しい。高海なんてまるで最初から聞いていなかつたように突つ伏している。

そして沢木先生の発言が俺達に壁を壊す唯一の希望となつた。

「彼方くんに引き続き新しい転校生がやつて来ました！入つてきて

」

なぜならその転校生というのが言うまでもなく――

「クシュン！…失礼。東京の音乃木坂というところからやつて来ました、桜内梨子です。」

「なつ――さ、桜内!?」

「…ん？あれ、江口君!？」

なんてこつたい。まさか第二の転校生が桜内だつたなんて！

いやしかしよく考えてみろ。うちのすぐ近所に桜内の家がありこのあたりに学校らしいものはほとんど無い。つまり、桜内がこの学校にくるのはほぼ確実だつた！何で気づかなかつたかな俺…

そういうえば桜内が教室入つてから高海が銅像みたいに固まつてゐる。

「一体どうした。」

「するとその刹那。」

「きつ奇跡だよ！」

「あつ…あなたは!?」

「そういえば高海と桜内は昨日会つてゐるんだつたな。何があつたのかはわからんが仲良くどほんしてたし。」

「桜内に気づくやいなや高海はドカドカと桜内に近づく。どこか期待したような目で。」

「…そう、どこか期待したように。」

「待て高海それはまだ早い！一回おちつ」

「一緒に、スクールアイドルやりませんか？」

「…遅かつた。」

故に彼女はバカと呼ばれる。

第十四話 ～波乱の彼方に～

「前回のあらすじ」

決意を新たにもう一度ダイヤさんの元へ直談判しにいった彼方達。壮絶（？）な言い争いを経て作曲者がいないことに気づく。そんなとき彼方に続いて第二の転校生がやつてきて――

「ごめんなさいっ！」

これが桜内の答えだった。そりやそうだ。初めての学校でわからぬことが多いのに急に「スクールアイドルやりませんか?」なんて聞かれてもはい、なんて答えるわけが無い。

高海はH.R.中に席をたつたため沢木先生によつて職員室へ強制連行された。

「はあ……高海の頭がここまで残念だつたとは」

「えーっと……彼方君。君は私に対してもつつの説明をしなくちゃならないよね？誤魔化さないでよ？」

「はいはいわかつてますよう……おーい桜内ー」

質問責めにあつてている桜内を説明のためにこちらに呼ぶ。

「江口君ありがとう……助かつたー……」

「何質問されてたんだ？」

「それは…………ひ、秘密／＼＼＼＼

「いやなんで」

どんなこと聞かれたのか聞きたかつただけなのになぜか頬を赤らめて秘密にされてしまつた。

「んじや順次立てて説明するぞ。まずはこの美少女転校生について

て

「ち、ちょっと！／＼＼＼＼

「ん、んんっ……改めまして桜内梨子です。高海さんは昨日海で会つて……」

「そうだつたんだ！あ、私は渡辺曜。千歌ちゃんの幼なじみなんだー！」

「一人つて幼なじみだつたんだ」

だ

「なんか少女漫画みたいな展開だね…」

「恋に発展しないつてオチまでついてるぞ」

恋、というワードのせいか桜内の顔がさつきみたいに赤くなつた。

「な、なに？」

「お前色恋沙汰苦手？」

いいいいいいや違うよ!/?

义星力

別に無理すんなって悪かっただな何回も書いて

そりがよそりがよ
彼方君テリカジレを知らぬいれど

10

「ち、違うの！ 本当はね…」

『ねーねー桜内さんって東京から来ただんだよね?』

『う、
うん』

『あれ、確かに彼方君も東京出身だよね?』

『 そ う だ つ た ！ あ 、 ジ や あ 知 り 合 い だ つ た ん じ ゃ な い ？ 』

『ううん
彼方君とは知り合いなんかじやなくて…』

『なるほどその綱があるのか！』

得、得、得、一
在、在、在、乃
乃、乃、乃、也

「あ、じやあ彼方君を追いかけて東京まで…？」

『なんて健気なの…！』

『ちーがーうー！』

「…つてことがあつて」

「「ああ～…」

「うち女子高だからねえ…皆気になるんだと思うよ?」

「私も女子高出だから気持ちは分からなくもないけど…ちょっと元気すぎない?」

「あははは…」

大変なんだな、女子高つて………というかそれ別に女子高関係無くないか?なんて野暮な事は聞かない。これぞデリカシー。

「まあそういう事でこれが俺が桜内と知り合いだつた経緯だ。」

「それについては理解したよ。じゃあ千歌ちゃんにμ, sの事を話さない理由は?」

「え、江口君高海さんにμ, sの事話してないの?」

「おう、正確には今話したくないだけだが」

「ずばりその心は?」

「謎かけじやねえんだから…今高海がμ, sに会うことは悪い意味で影響されるかもしれないからだ」

「悪い意味?」

そう、まさにこれが今高海にμ, sの事を話したくない理由だ。「言つちゃなんだが…渡辺も、それに桜内も俺や高海から話を聞くまで興味すら無かつたわけだ」

「まあね…べ、別に嫌いとかじゃないのよ?」

バツが悪そうに言う桜内。多分高海の勧誘を断つた事に若干の後ろめたさを感じているからだろう。

「わかってるよ。でも高海は違う。あいつはファンとしてというか固執しそぎ」というか…いい言葉が見つからないな…」

「まあ言いたいことはなんとなく理解したよ。じゃあつまりどういうこと?」

「こないだ渡辺言つたよな、『千歌ちゃんが言うμ, sの様にーと彼方君が言うμ, sの様にーはちがう』って」

「う、うん」

「別にその言葉に対しても反感を持つてる訳じゃない。ただこのままだと俺の言つたμ, sの様にーが現実になりかねないんだ。それだ

けはなんとしても避けたくて」

まだ一週間も高海と話したわけでは無いが大体どういう奴かは理解した。今の段階で会わせると、高海が目指すスクールアイドルは、そのものになってしまう事だろう。

「？」

「まあ、いいというか問題は無いと思う。具体的に言うとそうだなあ：グループとしての知名度が少なくとも沼津では知られるようになつてからだ」

「結構ハードル高くするのね」

「それまで秘密にしておくのも大変だろうしね」

「わが子である。たかサホリトする。」て泣めたんだ。
渡辺のためば

「そつかー！：わかつた！知りたいことは全部わかつたし何より私達のために、つていうのが素直に嬉しかった♪」

「うむ……お」

その仕草があまりにも可愛すぎて若干どもつた。

「というわけで桜内さん、どうにか作曲を頼めないかな…?」

「俺からも頼む。桜内くらいの美少女ならアイドルやつてもぜんづ
ざんづく頃な、ざー！」

実際、桜内が加入してくれると今後も幅広く活動できることは確か

だ。本人は自信が無いのかいつも否定しているが……

「うわあ：彼方君天然タラシだ」

「ナニナニナニナニ」

「私と千歌ちゃんなんて出会つて早々に口説かれたからね」

「別に口説いたつもりは微塵も御座いませんけど!」

結局このあと高海が戻つてくるまでひたすら弁解と謝罪を繰り返していた。あれ、何か大切な事を忘れている気がしなくもないけど……

まあ、いつか。

かの赤い彗星風に言うとこれは「若々故の失敗」だろう。思えばあの時思い出せば防げたミスだ。

結論から言おう。桜内が俺達から距離を取るようになってしまった。

教室移動の最中も昼飯の時も、はたまた体育の時もスクールアイドルにならないかと高海がしつこく勧誘してしまったのだ。

現在進行形で桜内を勧誘する高海、逃げる桜内。このままでは終わらないパーティーが始まる予感だ。止めないが。

だつて、party終わらない。

第三章／浦の星女学院絶対防衛線／

第十五話／憎悪の彼方に／

「前回のあらすじ」

千歌に変わつて梨子を勧誘する彼方と曜。色々脱線気味ではあつたがそれぞの胸のうちを語つた。

自分でいうのもなんだけどここ最近、俺は渡辺の事を見すぎている気がする。いや、正確にはちょっとした事情があつて見てしまうといふべきか：

事の発端は桜内が転校してきた日。朝に色々なドタバタがあつた後の授業中の事だつた。

俺の席は高海の一つ前になつてゐる。で、渡辺は高海の右。つまり俺の右下に当たるわけだ。ちなみに俺の隣は桜内である。

授業中。右後ろからなんか視線を感じるのだ（汗）

いや決して自意識過剰などではなく。じろじろつてほどではないのだが…まあ、見られたら普通気になる。だからこつちとしてもつい目が渡辺にいつてしまふというわけだ。

あれから数日がたつた今日も渡辺からの視線を感じる。あんまり見てくるからそろそろ聞くことにした。

「なあ、俺の背中になんかいるのか？」

「へつ？」

昼休み。例によつて桜内はそそくさとどつかに行つてしまつたので高海と渡辺と俺の三人で昼飯を食べている。

「いや、なんかここ最近渡辺からよく見られてる気がするというか…」

「そ、そ、そんなことにやいと思うけど…?!／＼＼＼＼めっちゃ噛んでるじゃないかバレバレだつづーの！」

「うん、曜ちゃん最近よく彼方君の事見てる気がする」「千歌ちゃん!？／＼＼＼＼

やつぱりか。高海に気づかれるほど俺のこと見てるって…
しかしここで意外な指摘を受ける。

「というか彼方君もしょっちゅう見てない？」
「…………うんまつて」

「／＼／＼

俺が渡辺を見てる？まさか。

「大体渡辺は俺より後ろなんだから見るなんて…」

「授業中に限つたことじやないよ。お昼食てる時とか登校中とか
体育のときとかも。たまに見つめあつてる時もあつたよ」

「嘘!?」

まずいな…完全に無意識だつた。というかそんなこと聞いたら余
計意識しちゃうじやん…

「お、俺そんなに見てたか…？」

「うん…なんか、見られてるなあつて思つてたけど／＼＼＼私の方
こそそんなに見てた？／＼＼＼

「かなりな。もう後ろから刺されるんじゃないかつてレベルで…」

「そ、そつか…」

「お、おう…」

なんとも形容しがたい微妙な空気が流れる。

「はいはいイチヤつかなーい」

「イチヤついてない！」

「はあ…全く、勘弁してくれよ。大体――

ピーンポーンパーンポーンと、お馴染みの放送がなる。まだ昼休み
だし誰か呼び出されるのか？と思つていると、案の定生徒の呼び出し
だつた。その生徒は…

『江口彼方君、高海千歌さん、渡辺曜さんの三人は至急理事長室まで來
てください』

「「俺（私）達？」」

なんだろう、何か悪いことしたつけと疑問におもいつつも三人で理
事長室に向かつた。

衝撃。

理事長室に入つて最初に沸いた感想だ。

そして次に沸き上がつてきたのは憎悪。

忘れるはずがない、もう13年もたつたが一日だってそいつの事を忘れた事など無かつた。

「……どの面下げてその椅子に座つてんだ、人殺しがあああ!!!!!!」
本来、鞠里さんが座るはずの高級そうな椅子には――――俺の父親。江口政孝が座つていた。

「やあ彼方。久しぶりだねえ……13年ぶりか」

「やあじやねえぞタコ！殺す……今すぐ殺してやる!!!」

様々な感情がグルグルと俺の頭を支配するなかで一つだけ、はつきりと理解した感情があつた。

殺意だ。

母さんをまるでボロ雑巾の如く扱い精神的に追い詰めた張本人である政孝を見て、小さなどす黒い感情が芽生えたのを理解した。その刹那、小さくて今にも消えそうだった漆黒の炎がまるでナイフのように鋭い炎に変わっていた。

「まつて彼方君！」一回落ち着いて！」

高海の制止の声が聞こえたがそんなものは知らん、俺は目の前のアレを断罪しなければならない。

親父に殴りかかるうと一步踏み出した瞬間に誰かに抱き締められた。この感じは……前に一度経験している。

「待つて、彼方君！私は君に人を殴つて欲しくない……優しい彼方君がいいの！」

そこでやつと我に帰る。どうにかして拳を下ろした。

「へえ……あの彼方に彼女か。お熱いねえ！」

「……それで、私達はどうして呼ばれたんですか？」

「そう怖い顔をしないでよ渡辺サン。」

「なんでもいい。そこに座つてるのがマリージやなくててめえな理

由を教える

渡辺のおかげでどうにか落ち着いた俺は最初に疑問をぶつける事にした。

「なあに、簡単な事だよ。こんなこと政治家も大企業もよくやつてるじゃないか。小原ホテルが今回そうしたように…」

「ま、さか…金で買収したとでも言いたいのか…!？」

政孝はニヤリと口角を上げる。

「さすが俺の息子だ。あのちっぽけなホテルチエーンなど俺にかかれれば軽くほいつとねえ…」

どうしてアレは人を怒らせるのが上手いのだろうか。しかもピンポイントで俺の怒りのツボを付いてくる。認めたくは無いが俺が嫌がる、もしくは貶されたくない点を的確に把握されている以上この男が自分の父親の他ならないと意識せざるをえない。

それが理解できたからどうにか冷静な自分を取り戻す事が出来た。

「…どうか、わかつた。じゃあここに来た目的を教える」

「それも大した理由じやない。この学校に男子がお前だけじやかわいそうだろうと思つてな、もう一人男子を連れてきた」

「[!!]」

別に男子一人でも困つてなどいない、そう反論しようとしたがすぐに引き下げた。あの悪鬼がまず家族に対して何かをしようとするはずがない。絶対に何か裏がある…!

「しかも嬉しい事に…そいつはお前の兄弟だ」

兄弟?バカ言え俺は一人っ子だ。いや、ということはつまり…

「…腹違ひの、をつけ忘れんなよ」

「まあそう怖い顔すんな。おーい入つてこい」

ガチャヤリと理事長室の重い扉を開けて入つてきたのは俺と同じかひとつ上くらい、しかしどこか昔の俺を彷彿させる少年が入つてきただ。

「…江口披方。よろしく」

「いいか彼方、よく聞け。本来ならこの学校に披方だけを転入させる算段だつたが風が変な手回しをしたせいで俺の気分はすこぶる悪

くなつた。だから俺はこの学校を潰す」

凪——母さんの名前を政孝はここに来て初めて口にした。変な手回しつてのは母さんが遺言書にマリーの母親経由で俺を浦女に入学させたことだろう。

「お前のせいでの学校は無くなるんだ。つたく東京のババア共も余計なことしやがつて……」

「——つ！かよねえ達に何かしたのか！」

「あ？面倒だしあつちには有名人がいる。下手に手え出すわけないだろ」

車窓から見える景色の様に流れていく状況に思考が追い付かない。浦女を潰す？ふざけるな、許せるわけがないだろそんなの。それがわかついてもそれが口に出ることは無かつた。

「話はそれだけだ。さつさと消えろカス！」

この先どうしていいのかすらわからないまま、おぼつかない足取りで俺達は理事長室を出たのだつた。

少年少女は絶望の淵に立つた。

第十六話／被方の彼方に

僕は警察官になるのが夢だった。誰かを助けることがかつこいいと思つていたからだ。

でもそれを成すにはあまりにも自分が非力過ぎた。

もともと母子家庭だつた僕の家にそいつは急に現れた。

「今日から君の父親になる江口政孝だ。よろしくな、披方！」

第一印象は大胆で豪快。決して悪い印象は受けなかつたが何せ急な話だつたので酷く驚いたのを覚えている。

「う、うん…でもお母さん、再婚するなら一言あつても良かつたのに」

母の再婚に関しては全然異論はない。むしろ僕が生まれてからずっと一人で寂しい思いをさせてしまつっていたので賛成なくらいだ。でも僕だつて家族。話くらいは聞いておきたかった。

「…………」

「…お母さん？」

が、様子がおかしい。喋りかけたのに返事が無いのだ。よく見ると顔は真っ青で震えている。

「なんだ、母さんは体調が悪いのか…向こうの部屋で休ませてくるよ」

「…わかつた。お母さんをよろしくね、『お父さん』」

思えばこの時既に気づくべきだつた。お父さんがお母さんの肩を抱きながら部屋の向こうに消えていつたその刹那。

ドゴツバギツ、というおおよそ介抱する上では出ないような音が聞こえたのだ。

お母さんが危ない！

咄嗟に僕は目の前の部屋に飛び込んだ。

そこで見た光景は凄惨を極めるものだつた。

お母さんが無抵抗なのを良いことにお父さんは暴行を加えていたのだ。

殴る、蹴る、ビンタ、罵声、髪を掴む…

「てめえのせいで披方にバレるところだつただろー・この能無し！」

「（）めんなさい…（）めん、なさい…」

涙を流しながら謝罪を繰り返すお母さん。それを呆然と見る僕にお父さんは気づいた。

「な、にを……やつて…いる、の…？」

「ちつ…予想より早く気付かれたか…まあいい。これからこの家では俺に逆らうとこうなるからな」

そう吐き捨てるどお父さんは荒々しく家を出ていった。

「そんな…なん、で…？なんで…」

殴られ続けたせいかお母さんは氣を失っていた。
それを見て今さら涙が出てきた。怖いから？お母さんがかわいそ
うだから？否、違う。

自分の非力さに泣いたのだ。

もしかしたらもつと早い段階でお母さんを助けられたかも知れない
のに我が身可愛さからあそこに飛び込めなかつた。

…あるいは僕もボコボコにされていたかも知れない。でもお母さんをにがすくらゐの余裕は稼げただろう。

僕はそれすらも出来なかつた。

「ああ、僕はどうしてこうも無力なんだ…」

その日以来お父さんが帰つてくることはなかつた。

当然学校の授業など右から左。もともと友達はほとんどいなか
ら誰も僕を心配しない。でもそれでいい。今は誰にも話しかけて欲
しくなかつた。

昼休みになつてもご飯など喉を通るわけなくただボーッと虚空を見つめる。

「（）んなところでなにしてるのよ」

それは唐突だつた。後ろから急にその娘は話しかけてきた。

「何つて…（）うやつて空見てるんだよ」

振り替えつて見ると、そこには可憐な美少女が立つていた。

「そういうことじゃなくて…今の貴方、まさにg u i l l t y！」

「はいはい……ぶれないよねえ善子ちゃん」

「なつ……！ヨシコ言うなあー！私は堕天使ヨハネよ！ヨ・ハ・ネ！」

この娘は津島善子ちゃん。僕の幼なじみで唯一の友達だ。勉強はずば抜けてできるくせに自分のこと墮天使とか言っちゃう系の女子。人生を常にロールプレイしていると言えば聞こえは良いがぶつちやけただの厨二病。

「貴方、最近変じやない？」

急に真面目な顔になつて善子ちゃんは聞いてきた。

「…随分容赦無いね」

「いいから」

「別にこれといつて変化は無いよ」

「……一週間府抜けた面してたヤツが言うセリフ？…身内になんかあつたの？」

その言葉に一瞬ドキッとする。

「…どうして？」

「変な事で悩んでるようには見えないけどアンタ自分の事で悩まないし、かといって友人関係で悩むほど友達いないし…もしかしたらお母さんに何かあつたんじやないかって思つたのよ」

なるほど…流石善子ちゃん。敵わないなあ。

「ふーん…じゃあそれがわかつてなんで話しかけてきたの？僕が一人でいたいってわかつてるくせに」

だから少し腹が立つた。多分善子ちゃんはわかつて声を掛けてきてる。実に性格悪い。

「あら、たつた一人の親友が元気ないのを心配しちゃいけない？」

…性格悪いけど、そういうところもぶれない。

「まったく…君にはいつも言いくるめられちゃうなあ」「ヒナタがこのヨハネに勝てた事がかつてあつたかしら？」

「…そうだったね」

そういえば幼稚園の頃から口喧嘩は結構やつてたけど一度も勝てたことがなかつた。ちなみに前に一度口喧嘩のコツを聞いたたら

「それは貴方が私のリトルデーモンだからよつ！」

つて言われてしまつた。本人はドヤ顔ぶちまかしてたけど質問に答えていないことにまだ彼女は気付いていない。

見破られて尚しらばつくれる元気など無いので仕方なく事情をある程度かいつまんでも話した。

「なにその男!? はあー…見下げたクズね！」

「全面同意。異論の余地も無いね。」

「人の悪口言えないアンタをここまで言わせるのも中々よね。 とつとと勘当しちゃえればいいのに…」

「そよううまくいかないよ。あの悪鬼はなに考えてるのかわからないし」

「くうくうくうくうくイライラするうくうくうく!!」

そう言つて善子ちゃんは思い切り立ち上がつた。その刹那。

「よ、善子ちゃん!？」

突然抱き締められたのだ。

「今の人たにしてやれる事なんてこれくらいだもの。だから…」「そりやありがたいっちゃありがたいけど…」

「…………あんたの辛そうな顔見えてるとあたしまで辛くなるの。それなのに、解決に導くこともその助けすらも出来ない。ならせめて苦しみを和らげてあげたいじゃない」

：やつぱりこの子は本当に優しい。僕がうじうじしている間に自分がやれることを精一杯やつていい。

僕は一体何をやつていたのだろう。

あるじやないか、僕に出来ること。それが本当に出来るのかはわからない。でも、目の前のこの女の子がやつているのに、僕がやらない等愚の骨頂だ。

その昔、第二次世界大戦時のドイツではヒトラーによるユダヤ人差別が行われていた。しかし時代が進むにつれそれに不満や怒りを感じた者達が抵抗運動を始めた。結果ヒトラーは自殺をし、差別は無くなつた。

彼らは後に抵抗者—レジスタンスと呼ばれた。

僕はレジスタンスだ。抵抗者だ。必ずあの悪鬼を、倒す。自分より少し小さな幼なじみの体を抱き締めながら、僕はひそかに決意するのだつた。

反撃の狼煙は密かに煙を吐いた。

第十六話 ～決意の彼方に～

～前回のあらすじ～

とある昼下がり、昼食を食べていた彼方達。途中、曜トイチャイ チャしだす彼方。おいそこ変われ！

そこに理事長から呼び出しを食らう。以前の話では小原鞠莉こと マリーが理事長を勤めるはずだったがそこにいたのは彼方の因縁の 相手で実の父親、江口政孝がいた。

「ね、ねえ彼方君：千歌ワケわかんないよ…どういうことなの？」 理事長室からの帰り、目にうつすら涙を浮かべた高海が俺に聞いてきた。渡辺は俯いたまま肩を震わせている。

こんなことがあつていいのだろうか。親父が俺にだけ嫌がらせなり成績操作をするならいい。これは俺と親父の問題だからだ。なのにあろうことか関係のない約二百人の浦女生をも巻き込もうとしている。もう恨み云々以前に人間として軽蔑する。

ここまで考えて、自分が案外冷静な事に気付く。しかし驚きはしなかつた。

今すべきことは取り乱す事にあらず。俺のto doはこれからどうするかを考えることだ。

「…一人とも、放課後暇か」

「…………？」

「俺の家に来い。作戦会議だ」

「まず、状況を確認するぞ

①本来理事長になるはずの小原鞠莉ではなく父親である江口政孝 が理事長になつていてる。曰く、「小原ホテルを金で買収した」と。

②浦の星女学院に俺以外の男子が来る。そいつは腹違いの俺の兄 弟で名前を江口披方という。

③詳しい理由はわからないが浦の星女学院を潰す事が目的らし い。」

「まあそれはわかっているけど……一体なんの作戦会議」

「……結局のところ、天の邪鬼なんだ」

「え……？」

「俺は今回二つの意味で驚いた。そのうち一つはお前らと同じ困惑が混じっているものだ」

「じゃあもう一つは？」

「あまりにも温すぎるんだ。アレがあの程度の脅しですむはずが無い。」

実際、俺が母さんから聞いた父さんの話というのは数えるくらいしかない。最終的に父さんの本質に気付いたのはかよねえ達に保護された後、警察によつて本格的な捜査が始まつてからだ。

「ヤツの行動原理は支配欲と自己満足だ。それを満たすためらどんなことでもするし、それが満たされなくても何でもする。まあ、それに気付いたのも最近なんだが……つまり一言で言うと人間のクズだ。」「そんな人に私達の学校乗っ取られちゃつたの……許せない！」

「うん！ 私達の学校を守らないと！」

「よし、じゃあ問題を一つずつ解決していくぞ」

①理事長が突如変わった事について

「じつはこれは既に原因がわかつてゐる。張本人に聞いてみた。」

「そ、 そうなの？」

「まあね。一応知り合いだから。」

一時は遡ること三時間前

『マリー！ 一体どういうことだ！？』

『あら……いきなり電話なんて何事デエスカ？』

『理事長になるんじやなかつたのか!? なんで理事長じやないんだ！』

『ち、 ちよつとカナタ……一回落ち付いて』

『お、 おう……それもそうか……』

『カナタから連絡が来ることは予想済みだつたよ。なんせ相手が相手だからね……』

『それで、一体これはどういうことなんだ?』

『多分、貴方が聞いた通りで間違いないよ……買収されたの。浦女を。うちちは公立じゃなくて学校法人だから……正直、なんでもありなの』
『でも学校ごと買い取るなんて聞いたこと無いぞ……そもそもマリーはどうやって理事長になる予定だったんだ?』

『さつき浦女は学校法人って言つたでしょ? つまり、みんなが月々払つてる授業料やら入学金やらで成り立つてるのはわかるわね?』

『そりやそんくらいは……んで?』

『彼方もそろそろわかってるかも知れないけど……浦女つて生徒の数に對して職員の数が多すぎると思わない?』

『あつ……そういうえば確かに』

『生徒数が少ないとすることは必然的に集まるお金も少なくなる。さらに今いる職員にも毎月給料を払わないといけない。これで経営が成り立つわけないでしょ?』

『だが浦女は表向きは問題が無いように運営できていた…………ああ、そういうことか』

『察しが良くて助かるわ♪』

『つまりマリーの家、小原ホテルが一枚噛んでるつて事だろ? そのコネ使つて理事長になるつて算段か……』

『perfect! けどまあ、とんだ邪魔が入ったわけだけど……』

『……案外冷静だな?』

『そりやあね。だつて私、浦女は買収されたなんて思つてないもの。』
『何……? どういうことだ?』

『脅しよ』

『脅し?』

『別に自慢する訳じゃないけど、うち日本でもかなりお金持ちの部類に入ると思うのよ』

『だな』

『でも彼方から聞いた話や身なりを見るに彼がとてもお金持つてるようには見えなかつたわ。むしろその逆。』

『ああ……俺もそこだけが疑問だつたんだ。アレは金を持つてるはずな

いのにどうしてって』

『だから何かをちらつかせて浦女を乗つ取つた”ように見せてる”つて考えたわけ』

『だとしたら一体何をネタに脅されてるんだ?』

『言つておくけどどちらかはかなりクリーンな会社よ?こつそりデータベース調べたから間違いない。』

『お、おう……とにかくやるべき事はわかつてるんだな?』

『ええ、もちろん!』

『なら協力しない手は無いな。出来ることは全部やつてやる!』

「…ということだ。だからまあ厳密に言うと解決の糸口が見つかったと言つうわけだな」

「そつか…でも、これに関しては私達が力になるのは難しくない?」

「同感だ。だから次だ。」

↗②浦の星女学院に俺以外の男子、江口被方が来ることについてく「俺はあいつと話をしてみようと思う。」

「でも、とても味方には見えなかつたな…ちよつとチカ怖かつたかも

⋮

「それに何歳かもわからぬからね…」

「うん、まあ実際俺初対面の人間基本的にダメだしかなり無理ゲーの予感しかしないけど」

「ちよつとちよつと…」

「とりあえずどうにかはするよ。ただ万が一って事もある。そのためにも二人には後ろにいてほしい。」

「万が一って?」

「緊張で俺がぶつ倒れたときの保険だ」

「そんなにダメなの!?仮にも兄弟だよ!」

「うん、わかつてはいるんだがな…」

とりあえずこれで重つ苦しい雰囲気はどうにか払拭した。確かに重つ苦しい話題ではあるが、だからこそ明るい調子でいきたい。その方が高海と渡辺もやりやすいだろうし何よりストレスにならない。

③江口政孝の目的について

「こればっかりは考えても仕方ない。諦めよう。」

「そんなあつさり諦めていいの？」

「当たり前だ。アレがなに考えてるかなんて検討つくわけない。思考の迷路にハマつて抜けなくなるのがオチだ」

「でも浦女を潰す、って言つてたよね？」

「あくまで憶測だがそれははつたりと見て問題無いだろう。さつき話したけどそもそも乗つ取られてる可能性すら低いんだ。余計なことに費やす時間も労力もない」

「ううーん…えっと、つまりどゆこと？」

高海さんは理解が追い付かなかつたらしい。

「わたしもちよつと理解が追い付いてないところはあるけど…つまり被方君を懐柔してこつちに引き込む、って事でいいの？」

「まあ、そんなところだ。これには二人に協力を仰ぐことになりそうだ。」

「もちろん協力はするけど…具体的にはどうするの？」

そこで俺は口角をあげた。その質問を待つていたんだ。

「スクールアイドルだよ。直接コミュニケーションを取りづらいからあえて間接的に訴えかけるんだ」

「ああ、なるほど！ それは確かにいい考え方だね！」

「なんかうまく彼方君に回されているなあ」

「そういうな渡辺…ただな、誤解を招かないように言っておくが俺はこれが目的でお前らのスクールアイドル活動を推したわけじやないからな。色々考えた結果こうなつただけだ。」

「わかつてるよ。私達は君がそんな人じやないつて知つてるもん。ね、千歌ちゃん！」

「もちろん！だから、まずは桜内さんをこつちに引き込まねば…」

「あはは…」

やるべき事は確定した。達成は決して簡単ではない。それでもやるしかない。

り。なせば成る。なさねばならぬ、何事も。なきは人の情けなりけ

第十七話 ～転寝の彼方に～

～前回のあらすじ～

衝撃の事実を前にして言葉を無くす曜達。だがここで取り乱さないのが江口彼方だ。冷静に状況を判断し今やるべき事を正しく見極めた。そして、彼らは自らの目標を達成するために動き出すのだった：

件の作戦会議から一日後。俺達は昨日と変わらず、今日も潮風が吹くこの教室で授業を受けている。

あんなに脅しをかけたのだから何か仕掛けてくるだろうと警戒していたのだが杞憂だつたみたいだ。

結果から言うと何もなかつた。

昨日決めた通り彼方と話してみようと決意していたのにその本人もいらないんじやあ話にならないっていうな…

昼休み、いつも通り（厳密には俺が来てかららしいが）屋上で昼飯を食べてるど如何にも不満げな顔した高海がぶーたら文句を言つてた。

「なーんだあなんにも起こんなかつたじゃーん…」

「いやいや何を言つてるんだお前は」

「だあーつてえ…」

と、こんな調子である。何か起こつて欲しかつたつて…無い方が良いに決まつてるだろうが…

「それで、桜内の件はどうなつた?」

「うーん…今日中には…」

「…そつちもダメなんだなよくわかつた」

何もなかつた訳ではなく常に何かあつた俺達であつた。

結局なんのアクションも無いまま迎えた放課後。色々あつて疲れたのか両サイドでは二人の美少女が静かな寝息を立ててる。ただ立てるだけならまだ良かつたのだが…

「なあーんで二人して俺の肩使うのかね…」

別に肩を貸すのが嫌な訳ではない。ただ二人共超が付くほど美女な上に立派なメロン（比喩表現）をお持ちときた。後は想像に任せるぞ、男子諸君。

要するに落ち着かないのだ。東京にいた頃ふざけてにこさんがあざとく肩に頭乗つけてきた時は何も感じ無かつたと言うのに。一体この差はなんなんだ…。

このままで本格的に寝入つてしまいそうだつたので二人を起ことにした。

「おーいお二人さん。そろそろ起きなされ。」

「んあ…？あれ、千歌つてば寝てたの…？」

「おはよう。昨日あんまり眠れなかつたんじやないか？」

「ああ…そうかも。あれ、曜ちゃん起きないね」

「ありや、手遅れだつたか。」

渡辺はまだ俺の肩に頭を預けっぱなしである。顔をよく見たら薄いクマが出来てる。よほど不安だつたのかほとんど眠れなかつたのだろう。

「あ、そろそろバス停だよ彼方君。」

「マジか。参つたな…」

「どうするの？」

「…このまま送つてくる。渡辺の降りる所わからんから後でメッセくれ」

「りょーかい！じやあね！曜ちゃんに変な事しないでよ！」

「す、するかバカ！」

他に客がいなくて心底良かつた…あの、運転手さん？なぜニヤニヤしているんですか？

あれから数分後。高海から送られてきたバス停が近づいてきたにも関わらず未だ目を覚ます様子の無い渡辺。

「おい渡辺。流石に目を覚ませ」

軽くデコピンをしてやるとあいたつと声を漏らしながら起きた。

「おい渡辺。流石に目を覚ませ」

「んあ…彼方君おはよ…」

「おはよう。そろそろバス停だから目覚ませ」

「んん…眠いい…」

「ほら、立つて立つて」

「んーん…やだー…」

寝起きで頭が回っていないのか子供のように駄々をこね始める渡辺。

「じゃあどうすんだよ…」

「…おんぶ、して」

「…どうせ俺に拒否権とかないんだろう」

「えへへ…」

結局うつらうつらして渡辺を背負つてバスを降りた。

しかし、なんだ。あんまりにも無防備すぎるんだよな、こいつ。立派なメロン（比喩表現）を押し付けてくるわ、ミニスカートから伸びた美しい太ももを躊躇いなく触らせるわ、抱きついてくるわともう誘つてんじやないかと錯覚するレベルである。ここまで耐えれる自分を絶賛したい！

この状況を見越したのか、高海からのメッセにはバス停と一緒に渡辺家への行き方も書いてあつた。変な所で鋭いよな、女子つて。バスを降りてから何分かたつた。渡辺は未だに目を覚まさない——かに思えた。

「ん、んん…あれ、私寝ちゃつてたのか…………んん!? 彼方君!?

「おはようさん。お目覚めは如何ですかな?」

「如何ですかな? ジやないよ! なんで彼方君がわ、私をおんぶしてんの!?

「なんでつて…お前が頼んだからおぶつてんだろうが」

「私そんなこと頼んで……あつ」

そこで渡辺の顔が赤くなつた。自分が言つたことを思い出したのだろう。

「私から頼んどいて言うのもなんだけど…お、重かつたら下ろしていいからね?」

「……」んな事言うのも癪だけどな。俺さ高校二年男子の平均筋力大幅に下回ってるんだよ。その俺が息切らさずに運べてんだからお前は相当軽いって事だ

「い、いやでも…」

「どうせ不安で昨日ろくに寝てないんだろ？今くらいゆっくり休め」「…………ありがと」

海に沈む夕日をバックに俺達は二人ボツチでゆっくり歩いた。

高海からの『明日午後一時に果南ちゃん家来て！』というメールに気付いたのは翌日だった。

天災とは忘れた頃にやつてくるのが常なのだ。

第十八話 ～宿泊の彼方に～

「前回のあらすじ」

彼方の家にて行われた作戦会議を受けて身構えながら学校へ行くもトラブルは皆無。被方の影も無くなんかまつたりしてしまった。あとは：二人のメロン（比喩表現）がメロロロロンツ！して危うくヨーソローする所だつた

「…なんだかなあ」

俺は今渡辺ん家にいる。しかもどういうわけかパジャマ姿ついで。事の発端を説明すると：

—さかのぼること三時間前—

『んじゃ、この辺でいいか』

『ごめん…本当にありがと』

『さーて、帰りますかね』

渡辺ん家に着いたときは既に日は落ち辺りは真っ暗だつた。

『…あ、あのね』

急に渡辺が言いづらそうに話しかけてきた。心なしか顔が赤い。

『…よかつたら、泊まつていかない／＼／＼？』

『………はい？』

『い、いやあのね！も、もうすぐ終バス来ちゃうし、彼方君どうせ体力無いから走つても間に合わないだろうし、だから…／＼／＼』

『つつても親御さんが許可出さないだろ？』

『あ、それは大丈夫。パパは今頃海外か日本のどつかだし。ママは…ま、なんとかなるでしょ！』

『いやい『というわけでちよつと待つて！』おい！』

数分後、慌ただしいバタバタッという音と共に渡辺が降りてきた。

『全然いいつて！』

『なあんで許可降りちゃうの!?』

そして今に至るというわけだ。風呂は先に俺が入り、現在は渡辺が

入つてる。理由は察してくれ。

渡辺（母）は夕飯の支度をしている最中らしく台所から出てこない。つまり、俺は渡辺家のリビングにて絶賛ボツチナウというわけである。なにこれ新手の嫌がらせ？

そわそわ落ち着かない時間を過ごしていると渡辺が風呂から上がってきた。

「なーにそわそわしてんの？」

「そ、そわそわしてないっての」

嘘である。

「まあなんでもいいけど。でも夕飯まで暇だね……」

「え？ いやいや、もうかれこれ一時間はかかつてんだから流石に……」

「普段はそうなんだけど……今日は彼方君来てるから物凄く張り切つて

るみたい。実は友達が私の家来るの彼方君が初めてなんだよね」

「へえ……そりゃあ意外だな。てつきり高海とか果南とか来てるものだ

とばっかり思つていたんだけど」

「……ねえ」

急に渡辺の声のトーンが下がつた。

「な、なんだよ」

「前々から気になつていたんだけどさ、なんで理事長とか果南ちゃんは下の名前で呼ぶのに私達は名字で呼び捨てなの？」

「なんでつて言われてもなあ……逆になんでそんなこと聞くのさ」

「そつ……それは……だつて……な、なんか嫌だなあつて……／＼／＼／＼

「え、じゃあなに。名前で読んだ方が良いの？」

返事は無い、が顔を赤くしながら小さくコクンと頷いた。それじやあ腹くくりますか。

「曜。…………これでいいのか？」

「…………も、もつかい／＼／＼／＼

「え」

……少し思い浮かべて欲しい。

①名前で呼んで欲しいの？→顔を赤くしながら頷く

←

②めちゃくちや可愛い。

←

③さらに目を潤ませ上目遣いで「もつかい／＼＼＼＼

←

④耐えれるやついるの?

「…曜」

「…なあに、彼方君／＼＼＼＼

「俺…俺さ、もしかしたらおま—
こここまで言つたときだつた。

「曜ちゃん、彼方くんご飯できたわよー」

渡辺（母）、まさかのご登場。

【悲報】俺氏、告白失敗

か、彼方君に名前で呼んでもらえた…!

実はお願いするのだけで心臓が出ちゃいそうになるくらい緊張してたんだよ…／＼＼＼

頑張つたんだし、ちょっとぴり欲張つちやつてもいい……よね?

「…………も、もつかい／＼＼＼＼

「え」

ドキドキしながら待つていると彼方君は意を決した様に口を開いた。

「…曜」

「…なあに、彼方君／＼＼＼＼

ああ、好きな人に名前を呼ばれるつていいな……

…好きな人?

えつ…えええええつ!わ、私今好きな人つて言つた!私が!?彼方君
を!?あわわ、あわわわわ…／＼＼＼＼

「俺…俺さ」

な、なんか彼方君真面目な顔してる…?ち、ちょっと待つて!なん

か千歌ちゃん家にあつた漫画にこんなシーンがあつたような…ってこのままじや私どうにかなつちやうよ!?

私は思わず目を閉じた。恥ずかしくて彼方君を見れない…//

「もしかしたらおま——」

彼方君が口を開きかけた時だつた。

「曜ちゃん、彼方くーんご飯できたわよー」

ええええええええええええええ!?

「…どしたの、二人してそんな沈んだ顔して」

「いえいえお気になさらず…」

「ママのバカ…」

お母さん、貴方は悪くないんです…ええ、場の空気に流されかけた俺が悪いんです…

「それより自己紹介がまだだつたわね。私の名前は渡辺朱（わたなべあかね）。固くならずに朱さんでいいよー」

「あ、は、はじめまして！江口彼方です。よろしくおねがいします！」

「いや、しかし曜ちゃんが男の子つれてくるとはねー」

「ち、ちょっとママ！」

「いつつも運動ばつかしてて男っ気なんて全然無かつたんだよ？だから…期待してるぜ彼方君☆」

「マ、ママ！」

「あはは…」

そのあとも楽しい（？）食事会は続いた。渡辺の昔の事が聞けて個人的にはすっげえ楽しかった。

それと、朱さんと話していると母さんと話していた時を思い出してしまつてちょっとセンチな気分になつた。でも、だからこそ、こんな何氣無い日常を守るためにもあの男を倒さねばと決意を新たにするのだった。

「その頃ホテルオハラでは、

「パパ、いい加減話してくれないかしら」

「…なんのことだ」

「惚けないで！あの男に何をされたのか教えてって言つてるの！」

「…そこまでしてあの学校を守る理由が？」

「ええありますとも！あの学校でもう一度やり直すの！果南と、ダイヤと…」

「ふざけるのも大概にしろ！」

「つ！」

「あの学校はお前の所有物じゃない！私はそんな我が儘のために理事長にしたわけでは無いっ！」

「くつ…」

第十九話 ～宿泊の彼方に～

～前までのあらすじ～

なんやかんやあつて曜の家に泊まる事になつた彼方（爆ぜるが良い）なんやかんやあつてすつごく良い雰囲気に（爆ぜるが良い）しかしそんな雰囲気は曜の母、朱によつてぶち壊された（G J！）

朱さんが作つた夕飯を食べ終わつた俺と曜はリビングのソファーでうだうだしてた。

「はあー…うまかつたなあ」

「あれはママ結構本気だしてたね：」

「そんでこのフツカフカのソファーときた。渡辺家最高かよ：」

「パパが買つてきたやつなんだ、これ」

へえ、と思いつつ横に座る曜をチラリと横目に見る。さつきは衝動と勢いでうつかり告白しかけたけど俺自身彼女の事をどう思つてるのだろうか。

「なあ曜」

「なーにー」

「…俺、人を好きになるつてよくわかんないんだ」

「…と、いうと？」

「生まれてこのかたまともな恋愛どころか友人すら居なかつたからな。好きな人ができる、誰かを恋愛対象として見るつて気持ちがよくわからなくて」

今思えばあんだけ周りに美人が揃つてるなかでよく恋に落ちなかつたものだ。μ,sのファンに知られようものなら確實に消される。

「そつかあ…ま、君の境遇がアレだからね：」

「そういうわけで曜。お前恋愛したことある？」

「は、はいいい!?／＼／＼／＼な、なんでそうなるの!?／＼／＼／＼

「なんでつて：お前可愛いんだし告白の一つや二つされてるだろ？」

「かつ…かわ!／＼／＼／＼

控えめに言つて、曜はかなりの美少女だ。おまけに元気もあれば愛嬌もある。実に男受けしそうな性格の持ち主なのだ。キラキラしてゐる所謂陽キャラの方々よりも俺のような地味で根暗な所謂陰キャラと呼ばれる方々からは特に。

「んでどうなんだ?」

「うえつと…その…あ、あるよ…多分…?」

「何故疑問形…?」

「だつて…その…も、もう!私の事はいいの!／＼＼＼それより彼方君は気になる人とかいないの!?」

「うむ…気になる人ねえ…まあ、いる…のかな」

「心当たり、というかもうほぼ確定だけど。

「……ふーん。ど、どんな人?」

「どんな人か…元気が良くて可愛くて、俺の心の支えになつてくれてる女の子だよ」

本人目の前にしてよくもまあこんなこと言えてるよな…これは当分フランクシユバックするんだろうな、黒歴史になるんだろうな!「…まあ相手が誰かとかは聞かないけど。別に気になんないしー」「なんでブスツとしてんの」

「うーるーさーいー!」

自分で振つてきてそれはないでしようよ…ム、Sの皆と話してゐるときはここまで会話がぶつ飛ぶことなんて無かつたのに。精々

『にこさん、ちょっと教えて欲しいことが…』

『にっこにつこにー☆にこにーはあにつこにこでえ、ニコニコなお☆』

『ニコニコニコニコうるせえよ!質問に答えてくださいよねえ!』

くらいいなものだった。…いや、こつちのが酷いか。

「とりあえずこの話は一旦おしまい!」

「はいはい…」

「それよりさ、これからどうするの?」

先程までの愉快な一時から一変、それだけでこいつが何を言わんとしているのかわかつた。

「千歌ちゃんが居たときは言わなかつた事、あるよね?」

「…何お前、エスパー?」

どうしてこうも曜には色々わかつてしまうのだろうか。俺の表情
そんなに解りやすいのか…?

「そんなんじゃないけど…」

「まあいい。確かに高海が居たときには話さなかつた事がある。それ
はな…」

「というわけだ。どうだ、楽しそうだろう?」

「それ絶つつ対楽しいよね!」

「さしあたつて今度の休日うちの倉庫を物色しようと思う。来てくれる
か?出来れば高海も連れてきてくれ」

「わかった!でも、私と彼方君だけじゃダメなの?」

曜は少し拗ねたように聞いてきた。お、俺だって君と二人きりなの
をどれだけ望んだことか…

「ああ、ダメだ。正直高海がいてもまだ足りないくらいだ」

しかしここは心を鬼にして突っぱねる。うだうだ続くとまずい。
具体的には俺の心が折れる。

「あ、ああ単純に人手の問題ね…」

「こないだ見付けた地下室が予想以上に散らかってなあ…気が滅
入つてたんだ」

「…なんか体よく片付けさせられる感半端ないんだけど
「まあまあしつかり目的もあるんだからそこら辺はご容赦願います
ぜ」

「しょーがない!その代わり無駄骨は嫌だよ?」

「そこは我が家の倉庫さんに期待していただく他無いな」

そこまで話すと曜はあふ、とあくびをしていた。あつという間に1
0時近くになつていた。

「眠いのか?」

「少し…」

「嘘つくなよ…」

曜がかなり眠たうなうのでそろそろ眠る事にした。しかしここであることに気付く。

「なあ、俺どこで寝ればいいんだ?」

「うーん…ちょっと聞いてくる…」

「お、おう…頼んだぞ」

そう言つて曜はおぼつかない足取りで朱さんの元に行つた。

が、帰つて来るときはピシッと歩いていた上におまけに顔は真つ赤だつた。

「え、えーとね、彼方君…その、ママから伝言」

『曜の部屋で、異論は認めないわよ☆』

…いや、いやいやいやいやいやいや！流石に、それは駄目なんじゃないんでしようか！？

「え、あ、おう…え、マジ？」

「…うん、マジ」

（そうして in 曜の部屋）

「お、お邪魔しまーす…」

「どつどど、どうぞ…」

いざ入つてみてしまうととてもなく落ち着かない。別に今までだつて女子の部屋にはさんざんっぱら入つてきたのだ。今さら何を、とも思つたがよく考えたら全部年上の、しかも家族に近い人達だつたのだ。そりや緊張もへつたくりも無いわけだ。

「じゃ、じゃあおれ床で寝るからクッション貸してくれ

「だからつていい年した男女が同じ布団つてのは…」

いくら朱さん公認とは言えやつて良いことと悪いことがある。お

互いの将来の為にもこれは避けなければならない。……俺がどうしたいかは別として。

しかし、爆弾つてのは突然降つてくるもんだ。

「わ、わわ私は……彼方君と一緒にね、寝たいなあ……なんて…」

……えてして慣れとは恐ろしいものだ。今日散々爆弾発言を落とされた俺は自分でも驚くほど動じてなかつた。何よりの証拠が「別に彼方君でもいいよ」ではなく「彼方君がいい」と言つた事だ。本人が望んだ事なら断りようがない。というか俺的に素晴らしい！

「…しゃーない。寝るか」

「う、うん！」

もぞ…と二人して布団に入ると隣から女の子特有のいい匂いがしてきた。しかも一人用ベッドのため手とか肩とか足とかすげえぶつかる。果たして寝れるのだろうか…そんな事を思いながら必死に眠りにつくのであつた。

そしてこつそり、俺はある人に一通のメールを送つた。

t o : × × ×
明日の夜、今と同じ時間に×で落ち合おう。
防衛線の準備を始める。 ×

第二十話 ～悪戯の彼方に～

～前回のあらすじ～

あのあと結局二人でいちゃついた曜と彼方。もうお前ら早く付き合えよ…と思わずにはいられない、今日この頃だつた。

さて、色々あつて曜と一晩共に過ごした俺だがこれがまあ驚くほど眠れなかつた。

そりやあそだう。となりで美少女が、それも自分の好きな女の子が無防備に寝ているのだ。眠れる事がおかしい。そんなこんなで現在朝五時。いまだに一睡もできていないです。

「今日が休みだつたのが幸いだな。学校あつたら間違いなく死んでたよこれ・・・」

眠れない？じゃあ別のことをするべきだ。そう考えるのが普通だ。俺だつてそうしたいさ！

・・・横で俺の（正確には曜の父親の物だが）寝巻きの裾を大事そうに握る曜がいなければなあ

さらには振りほどこうとすると眉間にシワがよつて裾を握る力が強くなるのだ。なんならきつき振りほどこうとして

「やあ・・・行かない・・・で・・・」

と、言われる始末だ。離すわけなかろう！

どうしようかとあれこれ考えてたら横がモゾモゾと動き曜が起き上がつた。

「ん・・・おあよ、彼方君・・・」

「おはよーさん、曜。随分早く起きるな」

「まーねえー・・・スクールアイドルだけじゃなくて飛び込みもやつてるからね私。日々の鍛練が大切なのだー！」

「鍛練つて・・・こんな時間から？」

「そうだよー。あさのうちにやつとけば色々好都合だから」

「へーえ・・・すげえなお前。俺は眠い・・・悪いが少しだけ寝させてくれ・・・」

曜には悪いがちょっと寝させてほしい。流石に一睡もしないのは洒落にならない上に不健康だし。

「んーわかつたー・・・つて、え？ その言い方だと寝てないみたいだけど・・・」

「・・・お察しの通り昨夜から少しも寝てないですがなにか？」
「なんで!?」

「・・・・・色々あんだよ。こつちも。」

お前がかわいすぎるのがいけない、と言えなかつた俺は正真正銘のチキン野郎です、はい。

「まあいいや。じゃあ私は少し走つてくるよ！」

「おーういつてらつさい・・・」

曜が外に出たのを見送つて俺は束の間の安眠を得ることができたのだった・・・

そして俺が起きたのは三時間後のことだつた。普段は休日でももつと早く起きているが、こんな状況だつたのだ。今日だけは勘弁してください・・・

下に降りると曜が朝食の準備をして待つていた。

「あれ、朱さんは？」

「ママならもう仕事に行つたよー」

「し、仕事？ 休日なのに大変だな・・・」

お勤め、ご苦労様です。

「そいいえば彼方君、昨日言つてたあれだけど千歌ちゃん大丈夫だつて！」

「おーそうか了解。」

高海からの了承も得た。ならばやることはもう決まつた。少しだけ逸る心を抑えつつ急いで曜の朝飯を搔き込んだ。

そして高海と合流した俺達は早速我が家の倉庫に向かつた。

「あれ、彼方君なんで曜ちゃんと來たの？」
「え、なんで？」

「いやなんでつて……普通自分の家から出てくるもんでしょ？」

「ああそれはn 「ストオオオオオオツブツ！」……え？」

「ちょ、ちょっと用事があつたんだよ！ねつ！ねつ！」

「お、おう……」

なんかものすごい勢いで阻止された……流石に恥ずかしかつたのか？

「まあ、そのなに？朝散歩してたら偶然渡辺に会つてな、それで一緒に来たんだ。なつ渡辺？」

「うん！ほ、本当にそれだけなんだよねー！」

「まかし方がだいぶ無理があつた気がしないでもないが下手な詮索をされないためにも強硬手段に出た。

「ふーん……ま、いつか。それより彼方君、私たち何を探せば良いの？」

そう、今日このおんぼろ倉庫に二人を呼んだのはあるものを探してもらうためだ。

「じゃあまずは石灰と火薬、フィルムケースとBB弾を頼む」

「わかつた！でもずいぶんと物騒な作戦になりそうだね」

「そういう割には顔が楽しそうじゃあないか高海」

「そりやーもう！あんなこと聞いて楽しみにならないわけ無いよ！」

「私も私も！」

二人ともついこの間までの沈鬱な雰囲気が嘘のように楽しそうである。まずはよかつた。やつぱり女の子は笑っていた方が可愛い。

二人が探し物をしている間、俺は地下室であるものの調整をしていた。

「まさかこんなものまであるとはなあ……」

俺が呟いたこんなの正体、それはエアガンである。

祭りなどで見かける安っぽいプラスチック銃ではない。本物の銃に近い、それこそ当たれば貫通はせずとも激痛が走るくらいの威力を持つ本格的なものだ。

「イサカM—37ライオットショットガン、バーネットワイルドキャッツC5……本当になんでこんなものがあるのやら」

名前が嫌に現実的だつたのでググつてみたところイサカM—37はベトナム戦争時代にアメリカ人が造つたアホみたいに威力の強いショットガンらしい。フィルムケースが必要なのもショットガンは散弾、つまり一発で多くを葬る銃であるため弾もそれ専用でなければならぬ。よつて自作である。

バーネットワイルドキャッツC5はクロスボウだ。なんでもロビン・フッドが使つたものの子孫らしい。こつちは本物である。扱いに注意しなければ……

「彼方くーん！言われたもの全部見つかつたけどどんくらい持つていけば良い？」

「逆に聞くけどどんくらいあるの？」

「たつつくさん！」

「一体どんな量なんだと急いで上に上がつてみるとそこには段ボーリ一杯のフィルムケースとプラスチックケース二十本は軽く越えそうなBB弾の塊があつた。

「あるだろうと予測をたてたのは俺だけさ……流石にこの量は予想外だつたよ！こんだけあれば大暴れできるわ！」

「そ、それはよかつた……」

そのあともがざごそ漁つてると色々なものが掘り出されていった。俺に用事があるためほどなくして二人は家に返した。

さて、その用事とやらだが……

「ありや、約束の五分前に来てみればもう皆揃つてたんですね

マリー、果南、ダイヤさん。」

そう、俺は昨日の時点での三人にあらかじめ連絡を取つて浦の星女学院正門前に集まつてもうつた。

「……で、私達はなぜ集められたのですか？」

この間会つたときよりもダイヤさんはいくらか機嫌が悪そうだ。

よくみればダイヤさんに限つたことではない。マリーも、果南も良い表情はしていない。

「なんか訳ありっぽいので先に用件を言います。」

「ここからが重要だ。この作戦を決行するにあたつてこの三人の協力は不可欠だからだ。」

大きく息を吸い込み、俺はその用件を口にした。

「浦女を守るためにすぐ大がかりないたずらをします。そのためにはどうか力を貸してください!!」

第二十一話 交渉の彼方に

「前回のあらすじ」

絶対防衛線の準備のため彼方の家の倉庫で物色を始めた彼方、千歌、曜。その一方で彼方は果南、鞠莉、ダイヤを呼び出した。その用件とは一体……

「ちょっと待つて彼方、話が見えない……というか、え？ 浦女を守る？ 一体どういうこと？」

「私も意味がわかりません……そもそも守られるようなことなんてないでしょ？」

「……おかしい。なぜ、事情を知らないんだ？ ただの生徒である果南は仕方ないにしても生徒会長のダイヤさんは知つてもおかしくないだろう。というかなぜ知らない？」

「なぜこの二人が知らないんだ？ つて顔してるわね、カナタ」

マリーが呆れたように見つめてくる。なぜ、わからないの？ そんな顔だ。

「……ヒント、なぜ私と彼方、それにちかつちと曜はある事を知つてるの？」

「なんで、つてそりや俺達はその場にいたんだし、というか普通に当事者だから……あつそういうことか」

よく考えればそうだつた。俺達はその場にいたから事情を知つている。だが他二人はそうじやなかつた。つまり……

「知ろうにも知りようがなかつた、つてことか」

「勘の良い子は好きよ♪」

「……ねえ、そろそろ呼ばれた理由教えてくれない？」

果南が不機嫌そうに聞いてきた。……本当、前に会つた時と印象が違ひすぎて困る。

「ああ、悪い。それじゃあ最初から説明する。まずは――」

「鞠莉さんっ!!」

話を聞き終わつて一番最初に声を上げた、いや荒げたのはダイヤさんだつた。

「ダ、ダイヤ?」

「なぜそんな大事なこと黙つてたんですか!?」

「・・・黙つてた訳じやないよ。だつて、伝えようがないじやない。」

「それにして・・・」「ダイヤストップ。話が進まない」

激昂するダイヤさんを果南が静かに制する。

「彼方、ひとつだけ質問させて」

「・・・なに?」

「こうなつた事情はわかつた。そして浦女を救おうとしてるのもわかつた。それは素直に嬉しい。・・・・じゃあ、なんでそこまでするの? 言い方悪くなつちやうけどまだこつちに来てから一週間そこらでしょ? ここまでする義理がある?」

「ちよつと果南!」

「鞠莉は黙つてて」

「・・・なんで、か。今考えると色々な理由が思い浮かぶな。

「たくさんあるよ。はじめて出来た友達が悲しむから。そんな友達の夢を応援したいから。お先真つ暗だつた俺を救つてくれた恩人が大切にしている学校だから。父親に復讐したいから。・・・でも、たぶんそのどれもあつてどれも違うと思う。本当の理由は、ただ好きな子に笑顔でいてほしいからだと思う。」

我ながらなんとも利己的な主張だと思う。でも、それが本心だつた。

「・・・そつか。そういうことならわかつたよ」
「え?」

「私だつて自分の学校無くなるのはいやだもん。できることならなんだつてする」

「・・・そうですわね。それに、今回の事と私たちの問題は本質的に關係ありませんし」

どうにか落ち着きを取り戻したダイヤさんも賛同の意を示していく

れた。

「私はもちろん最初からそのつもりよ。今さら聞くまでも無いでしょ
う?」

「・・・皆、本当にありがとう。」

ただ、まずは話を聞いてもらう段階にいつただけだろう。手伝ってくれる、とはいつたものの正直今から頼むことを快諾してくれるとは考えてない。ただ、それでも頼むしかない。

「まず、果南。」

「うん?」

「短期間、多分あと一週間くらいで俺に体力をつけてほしい。」

「え、ええ?」

「詳しいことは後々話すけど、どうしても手取り早く体力がほしい
んだ。もちろん、どんな過酷なもんでもいい。」

「・・・わかった。考えておく」

「ここまで順調だ。そもそも果南から断られる可能性は考えてな
い。問題はダイヤさんからだ。」

「次にダイヤさん。」

「はい」

「ダイヤさんには浦の星の資料を洗いざらい調べてもらいたい。学校
の構図、敷地面積、用具の備蓄量、とにかくたくさん、できるだけ多
くの情報がほしい」

「それくらいなら生徒会室にあるでしょう。わかりました、用意して
おきます。」

「それと、ダイヤさんの家つてこちへんじや有名な名家なんですよ
ね?」

マリーに問い合わせる。以前家を見てるので正直ほぼ確信してはい
たが念のため確認をとつておく。

「ええ、それだけあってあちこちにパイプを持つてるわよ?」

「ちょ、ちょっとやめてください・・・居心地わるいですわ」

「でも事実でしょ?きっとカナタはそれを利用しているのだと思うけ
れど」

「……明察。このメモ用紙に書いてある商店と交渉させてほしいんだ。そのためにはどうにか場を取り持つてほしい。」

「……呆れましたわ。町中巻き込んでまでイタズラしようなんてする人、あとにも先にもあなただけですわよ？」

「そちらも承知しましたわ。全てうまくいくと約束はできませんが精一杯交渉してみます。」

「ありがとうございます！」

「さて、それじゃあ私の役割とやらを聞かせてただけるかしら？」

さあ、あとはこの人に協力を要請できるかどうかだ。

「マリー、補給係になつてほしい。」

「お財布、の間違いじやなくて？」

「……嫌な言い方するなよ。この作戦でマリーに提供してもらつた分は一生かかつてでも返済する。必ずだ。」

「つまり借金ね？」

「……ああ。保証人もいない、法的な意味をもつ借用書も残せない。それでも、協力してほしい！」

これは、お願ひじゃない。子供のくだらないわがままだ。まさに他力本願、これぞ外道。俺が一番嫌つたやり方だ。それでも、やるしかないんだ。

「……いいわ！ただし、あまりにも現実的じやなかつたら怒るからね？」

「ついでに言えば貸せるのは私の資産の中からだからあんまり期待しないでね？」

「わかった。」

……とりあえず、第一関門は突破した。俺がやるべきことはあと二つ。

「そういうわけでみんな、よろしく頼む！」

「おまけく

「ま一つたく、とんでもないこと頼まれちゃつたなあ」

「本当ですわ。生徒会長の私をここまで働かせるなんて」

「私なんて金貸せだよ？もー嫌になっちゃう」

「「あつはははははは！」」

彼方が帰ったあと、三人はしゃべっていた。

「ねえ、鞠莉。」

「なあに？ 果南。」

「・・・いや、なんでもない」

「・・・そう」

この三人が抱えている闇は決して小さくなどない。むしろそれが柵になつて三人の心を蝕んでいる。

「お二人とも、先ほども言いましたが私たちの問題と今回の事はベクトルが違いますわ。くれぐれも私情を挟まないように」

遮るようにダイヤが口挟む。しかし、言葉とは裏腹にまるで納得などしていないうな顔つきだった。

「・・・わかってる」

「・・・ええ」

「では、もう夜も遅いです。今日のところはお開きといたしましよう」

それ以上なにも言わず、三人はそれぞれの帰路についた。ただそれでも。バラバラに見える三人は同じ想いを胸にこの作戦に挑むのだった。

『私たちの事に決着を付けるためにも、必ず浦女を守つて見せる!!』

想いよ、ひとつになれ。

第二十二話 ～鍛練の彼方に～

～前回のあらすじ～

三年生三人にとある交渉を持ちかけた彼方。様々な思いが交錯する中防衛線の準備は整っていく。彼方がやるべきことはあと二つ、時間もあまり無い。さあ、どう動く？

どうにか三年生三人に協力を取り付けることができた。心の中で小さくガツツポーズを決める。

すると果南から一本のメッセが届いた。

『明日、朝五時に淡島神社に動きやすい格好で来るよう。先に言っておくけど生半可な気持ちできたら死ぬからね？』

：おおう、マジか。まあ鍛えてくれって言つたのはこつちだ。とことん耐え抜いてやる。

続いてもう一通のメールを開く。相手はダイヤさんだ。

『先程の資料の件とその他諸々について詳しくお話したいのでこれから放課後、できる限りの情報をお渡ししたいので毎日来てください』こちらもまた随分ハードなことで。ただダイヤさんは本来の生徒会としての仕事があるなかで時間を取つてもらっている。文句など一言も言える立場ではない。

確認事項に目を通した俺は最後にマリーからのメールを開いた。先程彼女は自身の役割をお財布と称したがあれは少し違う。もちろんそういった意味合いも含まれるが彼女には本当の意味で補給係なのだ。

そしてその補給係としての最初の仕事、その成果が今から開くメールに記されている。

そうして開いた一通のメールには簡素な文字列。この作戦で最も重要な役割を果たす人物のメールアドレスが乗せられていた。

それを確認した俺はそのメアド宛に早速メールを打つ。

『五日後の昼休み、屋上にて待つ。』

それからは怒涛の毎日だった。果南が用意していた特訓、あれを学校に行くギリギリまでやつた。

「ほら、彼方！走るペース落ちてる！」

「はあつ……はあつ……」

「そんなんじゃ曜どころか浦女も救えないよ！」

「……ぐつ！まだ、まだあ……！」

「足の振り上げ方が違う！それじゃ彼方がダメージ受ける！同じこと言わせない!!」

「すみまつ……せんつ!!」

「口動かす暇あるなら足を動かせ！時間無いんでしょ!!」

「そう！そうやつて回るの！これならケガしないで行けるよ！」
「よつし！」

ダイヤさんが用意していた資料は予想以上に少なかつた。
「大口叩いておいてすみません、隅から隅まで探しましたがこれが限界でしたわ…」

「や、そればかりは仕方ないです。うまく活用していきましょう。
「はいっ！ではまずこの施設ですが……」

ダイヤさんは資料不足を補う、寧ろ付け足すように説明を加えてくれた。本当に生徒会長様々だ。

マリーからは隨時連絡が届く。

ただ親父もそこら辺は気にしているらしくなかなか有益な情報は手に入らなかつたという。

『作戦の日までにはどこでかいのを必ず持っていくわ』
『わかつた。くれぐれも無理はしないでくれ』

~~~~~

倉庫からの帰り道、彼方君は私達にこう言つた。

「高海達はこれからもアイドル活動を続けてくれ。」

『えつ、なんで？』

『なんでってお前な…始めるんだろ?スクールアイドル。』

『そりやそろだけにと！…………でも浦女か危ないのに』

千歌せやんの反応に彼方君はやれやれと言れんばかりにため息を

『あんなあ…お前がスクリュアイドル始めるのはなんでだ?』

『なんでつて、学校を守るために……』

『だろ？ だつたら学校がこんなんだから、そ、今やらなきゃ。目的は

『彼方君……』

確かに目的は同じだけど、じゃあどうすれば良いの？今日見た限りの品はどれもかなり物騒な物ばかりだつた。私達にできることなんであるのかな：

それからの彼方君は、はつきり言つて心配でしかなかつた。そりや私達とて作曲できる梨子ちゃんをまだ勧誘できてないから人の事言えないので…でもアザだらけで学校来たり、昼休みと放課後になると大量の資料抱えてご飯も食べずにどこかに行つたり、それなのに態度だけはいつも通りだもん。

私達に、私自身に出来ること。まだ見つかってない。彼があんなにも頑張っているのに、私は何も出来ないのであるのかな…?

{ } { } { } { } { } { } { } { } { } { }

三年生三人のお陰でだいぶ準備が整ってきた。各商會、自治体、漁協。様々な所にもアポを取つた。みんなよろこんで協力してくれた。

やあ、やる」とはあと一つ。

最後の準備を完遂するべく俺は屋上へ向かつた。

「よお、被方。よく来てくれたな」

## 第二十三話 ～吐露の彼方に～

～前回のあらすじ～

約一週間、三年生の三人と絶対防衛線の準備を進めてきた彼方達。一方で、千歌と曜の二人は…

最近、彼方くんの様子がおかしい…と、いうより恐ろしい。

ついこの間の倉庫大掃除以来彼方くんは毎朝遅刻ギリギリに、それも絆創膏やテープニングだけで登校してくる。一回気になつて彼方くん家行つてみたけど結局いなかつたり学校にで聞いても上手い具合にはぐらかされた。

本当に彼が心配で心配で仕方がない。自分でもなんでこんなに彼を気にしてしまうのか訳がわからない。そのことを前に千歌ちゃんに相談したら

「曜ちゃん…そこまで気づいていてなんで答えが出せないの!? バカな私でさえ答えわかってるよ!」

と散々言われてしまつた。しようがないじゃん、わかんないものはわかんないもん。

まあ私のことは一回置いておいて。とにかく彼方君からアイドル活動は続けてくれつて言われちゃつたからね、頑張つて桜内さん勧誘しなきや!

今日も千歌ちゃんが朝つぱらから桜内さんに突撃している…けど反応は薄いなあ。あ、千歌ちゃんけつづまづいた。うわあ痛そう…つてこんな呑気なこと考えている場合じやない。あんまりちゃんとしていられないし、そろそろ私も何か考えてみないと。

千歌ちゃんみたいにぶつつけ本番で行つてもどうせ断られちゃう。それなら、ちょっと趣向を変えていつてみようかな?

そして体育の授業が終わり終礼の準備を始めた頃に梨子ちゃんに

話しかけた。

「ねえねえ桜内さん、今日の放課後つて時間ある?」

「え?……は、はい。多分、大丈夫…」

「そんなに緊張しないで、別に変なことする訳じゃないんだから」

「そ、そう?…ごめんなさい、私つて人見知りだから…」

「ううん、気にしないで。それじゃあまた後で!」

よし、うまく誘えた!さて次は千歌ちゃんにどう説明したものか: とりあえず事情を搔い摘んで話してみよう。

「ねえねえ千歌ちゃん、今日の放課後私は桜内さんと用事あるから先に帰つてもらつてもいい?」

「ふえ?…どうしたの急に?」

「まあ色々とね。ダメかな?」

「んーん、大丈夫だよ!」

「ごめんねー、ありがとつ!」

これでシチュエーションは完璧だね。あとは実行に移すのみ。彼方君が頑張ってるんだもん、私ももつと頑張らないと!

そして放課後。今は桜内さんとたわいもない話をしながら二人で浜辺を歩いてる。最初は緊張気味だった(といふか警戒気味だった)けど今はちゃんと話してくれている。

「それで渡辺さん、今更だけどどうして私と話してくれてるの?」

「本当に今更だね……んーまあぶつちやけちゃえば千歌ちゃんと同じスクールアイドル部への勧誘だね。」

「やつぱり…」

「ごめんね……でもね、ちょっとだけ私の話を聞いて欲しいんだ」

「話?」

「うん。私もね、最初はスクールアイドル部入るつもりなかつたんだ。」

「やつぱり水泳部入つてるから?」

「そうだねえ。自分で言うのもあれだけど私これでも強化選手だからだ。」

練習も結構ハードだしだし正直他のことやるのは厳しかったんだ」「じゃあ、なんで大変なのにスクールアイドル部に?」

「……彼方君がいる、からだと思うんだ」

「え、江口君が?」

「うん。この間彼方君の身の上話を聞く機会があつてさ、なんだか考え方が変わったっていうか気持ちが固まつたっていうかでさ……統廃合かもって言われた時も本当なら全然関係ないはずの彼方君が一番に心配してるところとか見て動かされたんだ

。本人には恥ずかしいから絶対言わないけどね」

「そつか……確かに江口君お人好しだよね。私もまだ会つてから大してたつてないけどなんとなくそう思う。」

「でしょ?で、その彼方君が今すつごく頑張つてるの」

「頑張つてるつて……あ、最近やたら遅刻ギリギリだつたりあざだらけなのと関係あるの?」

「多分……詳しいことは聞いても教えてくれなかつたけどそうだと思う。でもどうして彼方君があそこまで頑張つてるのかは知つてるんだ」

そしてわたしはいよいよ本題に入ることにした。

「私達、浦女のみんなを守るため」

「ま、まもる? つてなんでそれがあざだらけの彼方君と関係あるのよ

⋮

「ごめん、ちよつと詳しことは言えない。でも少なくとも彼方君は浦女を守るために今も死ぬ気で何かをやつてる。わたしは彼方君のおかげで自分の新しい可能性を見つけることができた。だから、彼方君の助けに少しでもなりたい!そのためには桜内さん、いや。梨子ちゃん。あなたの力が必要なの!自分勝手なこと言つてるつてわかってる、でもわたしには、わたしたちにはあなたが必要なの!だから……」  
気づいたらわたしは涙を流しながら梨子ちゃんに向かつて頭を下げていた。

「ちょ、ちよつと! わかつたから頭を上げて!」

「え……?」

「あなたの熱意は伝わったわ、本気で言つてのも痛いほどわかる。  
でもね、わたしにもわたしなりの面倒臭い事情があるの。」

「う、うん……」

「……だからね、ちょっとと考えさせて」

「え……？ い、いいの？ 本当に！？」

「つてまだ入部するわけじゃないのよ？」

「わかつてるよ！ やつた――！」

「も、もう……ふふっ」

これで少しあは前に進んだかな？ でも、今は純粹にわたしの話が少し  
でも梨子ちゃんに届いたことが素直に嬉しい！ 誰かに思いが伝わる  
のつてこんなに嬉しいことなんだ！

「それじゃあもう日も暮れそうだしさろお開きにしましようか、  
曜ちゃん？」

「うん！ 梨子ちゃん！」

少女は想う。少年の力になりたいと。少年は想う、彼女を守りたい  
と。二人の想いがやがて大きな力とならんことを。

## 特別編

「U A 1 0 0 0 0 突破記念」例えばこんな o c e a  
n h o l i d a y

今日は高海と渡辺の三人で果南の家に来た。やることもなく暇をもて余してた所に高海から誘いを受けたのだ。

「果南ちゃんやつほー！」

「おーっす」

「あ、千歌に曜！それに彼方も！いらっしやい！」

「突然だけどさ、しりとりやらない？」

果南が作った昼飯（うまい）を食べると渡辺が急に変なことを言い出した。

「唐突だな…まあ俺は構わないが」

「私もさんせー！負けないよ～？」

「私あんまり頭良くないけど大丈夫かな…」

そして運命のじやんけんタイム。ここで責める相手と責められる相手が決まる。さあ、結果は…

「「最初はラブ！サンサンサンシャインでじやんけんぽん！」」

「え、待ってなにそのじやんけん!?」

結果：果南→渡辺→俺→千歌

という順番に

※ここからは説明パートはほとんど入りません

「じゃあいくよー」

「「「はーい」」

「静岡」

「か、か、か…狩り！」

「硫酸アルミニウム」

「ナニソレつ!?ええーと…虫!」

「……しいたけ」

「け・け・ケチ?」

「何故に疑問系」

「うるさいなあ……ほら、彼方君の番。」

「お、おう……えーちっかアルミニウム」

「……つ! む、ムツゴロウ!」

「なんでムツゴロウ……えつとうなぎ。」

「ギネス!」

「水素化アルミニウム」

「またアルミニウムー! 彼方君マニアックすぎでしょ! ……虫かび」

!

「ダ・・・○空」

「サイヤ人の末裔……無難に海!」

「みかん……ジュース」

「ちよつと! それありなの!? ……スルメイカ」

「言葉のセレクトが親父臭いよ千歌……菓子。」

「シジミ!」

「……水芭蕉」

「そんなに凝らなくとも……海坊主!」

「不吉だからやめて……ズツキー!」

「うーんと……憎しみ」

「怖いこと言うなよ……というかまたみ……?さては攻撃体制にはいつ

たな? 御手洗団子」

「んーと……ゴデ○バ」

「え、なにそれ!?」

「「はつ!?!」」

衝撃の事実発覚! 松浦氏まさかゴデ○バを知らないなんて…

「果南ちゃん……流石に私でもわかつたよ……?」

「ええつ! そんな、千歌よりは頭良いと思つてたのにい!」

「一学年下にムキになるなよ……」

「というかさ、なんか飽きたよね……」

「うおい高海い！貴様言つてはならぬことを！」

「実を言うと私も…」

「ごめん、彼方…」

うーん三対一か…こりや分が悪い。まあ俺自身べつにしりとりに思い入れがあるわけでもないので終わることにした。

「じゃあ何するのー…暇だよー…」

「食べたばつかだし動くことはしたくないねえ…」

「〔〔うーん…〕〕

「ならさ、彼方に決めてもらおうよ♪ほら、東京にいたんだし最先端の遊びとかしつてそうじやない？」

…人生で初めて田舎町に来てわかつたことがひとつある。

東京は別に二十二世紀じゃない！

どうにも東京から来たつてだけで流行を常に把握してると思われがちなのだがな、俺みたいにそういうのに疎いやつだつているんですね。

「あのですね果南さん…」

「ほらほら早くー！」

ん…仕方ない。あれは死亡遊戯だからやりたくないなかつたんだけど腹を括らなくてはダメそうだ。

〔…果南、割り箸二本と紙切れ、ペンと適当なサイズの箱を用意してくれ！〕

「え？う、うん」

「何々？何が始まるのー？」

ここまで聞いてもうなんとなくわかつた人もいるのでは無いだろうか？この遊びはかよねえ達と遊んでたときに何回かやつたことのある遊びだ。俺がこの遊びをする時は基本的に無事ではすまない。にこさんは赤面しちゃうし、絵里ねえは赤面しちゃうし、海未さんは「破廉恥です…」とか言つて倒れちゃう。理由なぞ知らん。そして俺は高らかにその死亡遊戯の名前を宣言した。

「王様ゲームをやるぞっ!!」

「お、おお……なんか都会っぽい！」

「で、そのおーさまげーむ？つてどういう遊びなの？」

「ふつふつふ……それではご説明いたしましょう！」

「ルール」

① 「王様だーれだ？」の掛け声とともに割り箸を引く。そのうち一本には赤い印が書いてある。それを引いた人が王様になる。

② 次に番号が書いてある紙を引く。

③ 王様になつた人は一つ命令を出せる。ただし命令の仕方は「何番と何番は○○して！」とか「何番は私に○○して！」など。

④ 王様の命令は絶対。

⑤ もう一度言おう。王様の命令は絶対だ。

「……以上。何か質問がある人は？」

「ありません！」

「よし、じゃあ始めるぞ！」

「第一ラウンド――

「「「王様だーれだ？」」

「あ、私だ。」

最初の王様は果南だつた。

まあ、所詮果南。大した命令などそうしてくるとは思えな――

「じゃあ三番と二番はこのゲーム終わるまで恋人繫ぎー！」

くなかつたあああ！え、ちょっと待つて一番つて……

「……俺が二番です」

「ええっ！……あ」

声を上げたのは渡辺だつた。つまり……

「わ、私が三番……／＼／＼

「オイチヨツトマテヤ」

初っぱなからハードル高すぎるぜ果南っ！

「そ、そういうのつてさ、こう場の雰囲気とかがいい感じに良くなつてきてからやるもんじやないかなあ」

「王様の命令は絶対なんですよー？彼方が言つたんだよー？」

「いや、しかしだな…」  
チキンナイトの俺がたじたじしてると渡辺がちょっと困った感じに聞いてきた。

「以後しばらく彼方と曜がイチャつきます  
「わ、わたしとじゃその…イヤ、かなあ…?」

…上目遣い＆手をもじもじさせながらね。

「ば、ばつきやろう！そんな訳あるか！むしろ渡辺みたいな美少女と恋人繫ぎとか神様マジでありがとうと言いたい！」

「ふええ／＼／＼!?ちよちよ、美少女つてそんな――」

「しかし、俺にだつて羞恥心はある！いやそれ以上に俺ごときの汚

らわしい存在が渡辺の美しい手を汚すなど愚の骨頂であり――」「トップトップ／＼／＼！というか彼方君だつて相当カツコいい方の部類だよ！そんな人とずっと手を繋ぐなんて私だつて恥ずかしくて」

「はいはいリア充リア充。とつと手を繫いで」

やいのやいの渡辺と言つてると果南と千歌にジト目で見られた。

「ああもう！来い渡辺！」

「うえつ!?

もう恥ずかしさに我慢できなくなつた。というわけでさつさと渡辺の手を取つてしまつた。

「…………／＼／＼」

…なにこの沈黙。

「なんて私こんな命令出したんだろ…」

「後悔するくらいならこんな命令出さないでよ果南ちゃん…」

「くあー！もうさつさと次行くぞ！」

—第二ラウンド—

「「「王様だーれだ?」」」

「来たああああー！俺だ！」

「「「うわあ…」」」

ちよつと？俺が王様になつた途端あからさまに嫌な顔しないでね。  
別に如何わしい命令とかしないからね？

「んーじやあ二番は一番に膝枕とか」

「あ、二番私だ」

「一番私だよー」

どうやら果南が高海に膝枕するみたいだ。

「ほい、千歌」

「わーい」

⋮終了。

「なんか⋮あれだね。つまんないね。」

「すまん高海悪かつたからもうほじくり返さないで」

彼と彼女らの王様ゲームはまだまだ続く